会報
特攻
平成25年2月

第94号

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒102-0073　東京都千代田区九段北3-1-1靖國神社遊就館内・地階
電　話　03（5213）4594
ＦＡＸ　03（5213）4596
http://www.tokkotai.or.jp
振替口座　00140-6-59580

編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

目次

靖國神社年越し詣で……1
謹賀新年……2
平成25年　年頭のご挨拶……3
皇居参賀二題……6
平成25年　宮中「歌会始」の御儀……9
平成24年度「回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式」に参列して……10
回天の追憶と祈り（抄その五）……15
戦後政治が招いた領土問題に思う……19
私の初夢……22
「世界に一つだけの華」―海軍落下傘部隊ゆかりの地を巡る―……23
特攻平和観音造立趣旨……27
NHK番組に対する所見……30
大阪護国神社「特攻勇士慰霊祭」に参列して……33
平成24年度旧海軍串良基地出撃戦没者追悼式に参列して……37
福岡県護国神社「特攻勇士之像」奉納除幕式に参列して……39
『戦場に赴くにあたり』―発見された挺進隊員の遺書―……41
川南護国神社秋季大祭……43
新刊図書紹介……34
オペラ―KAMIKAZE―神風―……44
平成24年度第3回定時理事会・臨時評議員会等報告……45
事務局からの報告等……48

元旦午前零時の靖國神社拝殿前

年越し詣での人波第一波（神門開扉直後）

靖國神社奉納大絵馬

靖國神社年越し詣で

平成24年暮れの大晦日から25年元旦にかけて、恒例の靖國神社年越し詣でを行った。平成24年も洪水等の大災害が多く、東日本大震災と福島原発事故による災害復興は遅々として進まず、経済の悪化による国力の低下、政治の混迷に付け込んだ、中国の度重なる尖閣諸島領域侵犯、竹島・北方四島の実効支配の強化、北朝鮮のミサル発射等国内外の鬱屈した情勢の中で推移したが、暮れに至って漸く状況が上向いてきた感がする。

明くれば平成25年、癸巳（みずのとみ）の年、『広辞苑』によれば、巳は「へみ（蛇）」の略という。筆者の田舎（九州）の方では、一般に「くちなわ（朽縄）」とも言うが、蛇の古名らしい。蛇の極めて大きなものを「おろち（大蛇）」と言う。「おろ」は奈良時代の東国方言で、峰・岳の意。「ち」は、「たち」「つち」の略で、古代語の神の別称。合して峰神・岳神の意。古事記に出てくる「高志（こし）の八俣（やまた）の大蛇（おろち）」や素戔嗚命が大蛇を斬ったという十拳剣（とつかのつるぎ）を「大蛇（おろち）の麁正（あらまさ）」というように、大蛇は山の神又はその化身とされたようである。一例であるが、新潟県（昔は高志（こし）あるいは越（こし）の国と称された）の弥彦山は山自体が弥彦神社の御神体・峰神であり、頂上は笹と低木に覆われた神聖な場所とされて何もないが、その近くの神殿に白蛇を数尾飼ってあり、神の化身として崇められている。

しかし、一般に巳年は豊作とか、金

運が良いとか言われるのは、何故であろうか。筆者の勝手な想像であるが、昔の農家の米倉などには蛇（主に青大将など）が天井に巣くっており、鼠を捕食してくれるので、福の神だから決して殺してはいけないと言われたものである。ところが、それが鶏小屋に巣くうと、卵や雛鳥を捕食するので困ったものであった。しかし、総じて農家では、蛇は福の神として大事に扱われたようであり、そのようなことから、巳年は吉、とされたのかもしれない。

暮れの衆議院総選挙で自民党が圧勝し、第二次安倍内閣が成立した。安倍晋三総理は早速、公約の経済財政の再生、災害復興、国土の強化、外交・国防の建て直し、憲法改正等々山積する国内外の課題に果敢に取り組む姿勢を見せている。何よりも国家観に欠けた民主党政権に振り回された3年半の国力の低下を速やかに回復、躍進させるよう期待したいところである。たまたま巳年に当たり、大蛇の脱皮・再生にあやかって、強い日本の再生といきた

謹賀新年

公益財団法人　偕行社

理事長　志摩　篤
副理事長　塩田　章
同　深山　明敏
専務理事　白石　一郎
事務局長　若木　利博

公益財団法人　水交会

会長　夏川　和也
理事長　藤田　幸生
副理事長　森本　茂夫
専務理事　齋藤　隆
事務局長　本多　宏隆

つばさ会

会長　竹河内捷次
副会長　杉山　弘
同　山本　修三
同　小田　邦博
同　藤川　壽夫
同　奥村佐登志
専務理事　小鹿　勝見
副専務理事　浦山　長人

公益財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長　島村　宜伸
理事長　柚木　文夫
常務理事　岩田　司朗

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長　杉山　蕃
副理事長　藤田　幸生
専務理事　衣笠　陽雄
理事　深山　明敏
同　大久保　隆
同　廣嶋　文武
同　臼田　智子
同　笹　幸恵
同　小倉　利之
同　水町　博勝
監事　伊集院雅英
事務局長　羽渕　徹也

評議員　秋山　政隆
同　穴山　正司
同　飯田　正能
同　石井　光政
同　石井　千春
同　及川　昌彦
同　太田　兼照
同　大穂　園井
同　倉形　桃代
同　高嶋　博視
同　中江　仁
同　中村　家久
同　新垣　敬輝
同　根木　東洋
同　早川　雅彦

平成25年　年頭のご挨拶

理事長　杉山　蕃

全国の特攻隊慰霊顕彰会関係の皆様、明けましておめでとうございます。謹んで新年を寿ぎ、皆様にとつて良い年になりますよう、心より祈念申し上げます。

昨年は、我が国にとっても大変な年でありました。民主党政権は、年末の衆議院選挙での極端な惨敗で、二大政党時代到来の期待も虚しく、3年余で幕を閉じることとなりました。思えば、鳩山政権の普天間移設に係る軽率な判断に端を発した挫折、地震津波・原発事故に際し、組織的な対応が取れなかった市民運動家出身の菅総理の自滅、梟雄小沢派の離脱等、明確なリーダーシップのない集合体であった民主党の欠陥を暴露した形の3年間でありました。衆望を担った形の野田政権は、国家財政建て直しの第一歩とも言うべき増税路線に「三党合意」の形で道を開いたことは、大きく評価されるべきでありますが、「増税に踏み切った政権は崩壊する」とのジンクスどおりの結果となりました。

我が慰霊顕彰会におきましては、かつてない厳しい苦難の年でありました。既に機関誌上にも弔慰を述べさせていただきました山本会長、菅原顧問の御逝去は正に、組織を支えてこられた大黒柱を失ったと言っても過言ではないでしょう。加えて、専務理事として活躍中であった藤田理事が、水交会理事長の大任に就かれ、本顕彰会での専務理事を降番することとなりました。更に追い討ちをかける形で、栗原宏監事が11月29日に逝去されるという事態に直面しました。栗原氏は皆様ご承知の如く、航空自衛隊退官後20年の長きにわたって、協会・顕彰会の事務局長・理事そして監事を歴任され、本会に対する貢献度は極めて高いものがありました。特にここ10年余金融恐慌と言われる時代に、財務管理の面で発揮された手腕は誠に見事なもので、本会活動の基盤を堅実に支えていただいたことに感謝申し上げ、深く弔慰を捧げるものであります。このような状況から、昨年は我が顕彰会にとって「世代交代」という表現以上の厳しい試練の年でありました。幸い藤田理事の後任には、新進気鋭の衣笠理事が業務を引き継がれ、新しい布陣で会務が進捗しておりますことは心強い限りであります。

さて本年は、終戦より68年を経ることとなりました。特攻隊員として散華されました方々は、当時二十歳前後の若人ですが、生存される戦友・同期の方々も90歳に垂んとすることとなり、急激にその数を減らしつつあります。このような時代に立ち至って、我々が心せねばならないのは、若い盛りの特攻隊員の皆様が、現在に生きる我々に何を望み、如何に有るべきかを望んで散って行かれたかということに想いを馳せることでありましょう。勿論、数千を数える英霊の、それぞれのお考え、お立場、環境も一様ではありませんし、それぞれ残された遺書もあります。要はその逐一を云々するのではなく、今に生きる我々が、ともすれば怠惰・華美・享楽に流れがちな人間の弱さを自覚し、自戒する引き金として、若くして散った方々の心情を忖度することが、慰霊の持つ重要な意義であろうと考えるところです。換言すれば、死者に手向けをし、弔慰を表することは、人として当然の習わしですが、犠牲者の価値をより高いものに引き上げ、次世代の良き発展を目指す精神的根拠にすることの重要性を自覚しなければならないと考える次第です。選挙も終わりましたが、選挙戦を通じ、論点になったのは経済問題、震災復興問題、原発問題等国内問題、それも生活に密接した「投票」を意識し過ぎたパーフォーマンス重視のようでありました。特攻隊英霊の皆様が望まれたであろう誇り高い国家建設の観点からは、首を傾げざるを得ない主張が多かったように受け取りました。幸い新生安倍政権には、山積する課題と国民の大きな期待が課せられておりますが、大衆迎合的主張に終始した他の政党に比し、日米安保の再構築、領土保全への毅然たる対応等、国家の矜持に論点を置いた姿勢を基本としており、その展開に大いに期待したいと存じます。我々特攻隊戦没者慰霊顕彰会におきましても、「果たしてそのことは、特攻隊英霊が望まれるようなことか」をキーワードに、誇れる我が国の再生に微力を尽くすことを目指して、新しい年を歩んで行きたいと存ずる次第であります。

重ねて、今年が皆様にとって良き年になりますよう祈念申し上げて、新年のご挨拶といたします。

いものである。そして、このような時にこそ、安倍総理始め閣僚や国会議員は、揃って靖國神社に参拝し、靖國の英霊の御前で、英霊が未来に託された尊いその志を我が心に刻むべきであろう。この度の年越し詣では、取り分けその思いに駆られつつ家を出た。

靖國神社ほど参詣者を手厚く遇して下さる神社はないのではないか。特に年越し詣でに当たっては、寒さを凌ぐための種々の配慮がなされている。境内各所での、ボーイスカウト東京連盟の大勢の少年・少女達による庭燎（かがり火）奉仕、遊就館前における熱い甘酒の接待、終夜開館されている遊就館、参集殿内でのお茶の接待等々。勿論、外苑参道の両側には沢山の屋台が立ち並び、参詣者が一時の暖を取り、腹拵えをするには事欠かない。若者や家族連れにとつては楽しい年越し詣でである。日本人の古里がそこにはある。そして、内苑に進み身を清めて神前に頭を垂れれば、我々の先祖や先輩、同僚の御霊が手厚く祀られている。国のため命を捧げた人々の英魂が、身分の如何を問わず鄭重に祀られているのである。

地下鉄九段下駅を出て坂を登れば、やがて大鳥居が漆黒の空に、ライトを受けて巨人の如く聳え立つ。これより第二鳥居までの参道両側には、沢山の屋台が並び、食べ物の臭いや参詣者のさんざめきに包まれ、いずこも同じ年越し詣での景観である。だが、ここまでは外苑、下乗札の立つ内苑神域に入れば、凛とした空気に包まれ、数百の参詣者が静かに開門を待つ。圧倒的に若者が多く、筆者のような高齢者の姿はほとんど見当たらない。外国人の姿もかなり多い。歴史と伝統のある日本人の風習が、そして日本人の美しい心が、外国人の目にはどのように映っているのであろうか。

閉ざされた神門中央扉の十六重弁菊の大御紋章がライトを受けて金色に輝き、大凧と大羽子板が左右の柱に飾られて、新しい年への門出を祝するかのようである。大手水舎の銅板屋根もライトを受けて輝き、その前で庭燎（かがり火）奉仕をするボーイスカウトの少年達の姿も凛々しく映える。

やがて零時30分前、一斉に開扉されると、ライトアップされた正面の拝殿が神々しく目に飛び込んでくる。一同粛々と拝殿前の鳥居付近まで進む。この日、大晦日の夜は風も凪いで絶好の日和、漆黒の空を背景に拝殿の甍が聳え立ち、金色の御紋章がライトに映えて輝き、見事なコントラストをなしている。更にまた今日の拝殿は特別に紫の幔幕を廻らし、白く染め抜かれた十六重弁菊の大御紋章が目に鮮やかである。

正零時、暗夜の静寂を破って拝殿の大太鼓が鳴り響くと、一斉に「明けましておめでとうございます」と互いに挨拶を交わして拝殿に進み、柏手を打ち、深く低頭して御霊に感謝の誠を捧げる。若者達が中心ではあるが、真摯な参詣者の姿がそこにある。

新年拝殿掲示の天皇陛下の御製は、「明け初むる賢所（かしこどころ）の庭の面（も）は　雪積む中にかがり火赤し」とあり、平成17年の賢所の「歳旦祭」を詠まれたものである。天皇陛下の御製に

元旦午前零時過ぎ拝殿前の人波

神門前　庭燎奉仕のボーイスカウト

全国神社奉納絵馬展

は深い祈りや慈しみの御心が込められており、霊性とも霊力とも言うべき不思議な力、人々の心に深い感動を与える力を持っている。

拝殿の右側には例年の如く伊勢絵馬協賛会から献上された大絵馬が掲げられている。今年は癸巳の年、干支の巳に因み、瓢（ひょうたん）を抱くように巻きついた蛇の絵が描かれた見事なものである。福・吉兆を表すものと思われる

また、参集殿の前には、全国約三百三十余社から奉納された絵馬が美しく飾られており、その中に懐かしい郷里の氏神様の絵馬を発見して感無量。靖國神社に寄せる、護国神社を始めとする全国の神社及び善良なる国民の崇敬心の篤さを思わせる。

靖國神社遊就館特別展

更に、境内各所で、庭燎奉仕をするボーイスカウト東京連盟の大勢の少年少女達や受付案内の事務奉仕をする崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若者達の健気な姿に感動。このような日本人の心を受け継ぐ青少年のいる限り、未来への展望が開けるような気がする。

参拝を終え、神社心尽くしの甘酒で一息ついた後、夜通し開館されている遊就館で、特別展「奉納新春刀剣展」を拝観する。平成21年2月第78号のこの欄にも記載させていただいたが、この刀剣展に関連して、次の記事を再度掲載させていただくことにする。

刀剣、なかんずく日本刀は、古来武士の魂とされ、武器としては勿論であるが、破邪の利剣とも言われて、正義、顕正の象徴とされ、神器としても尊崇されてきた。三種の神器の一つである天叢雲剣（後に草薙剣）は、その最たるものであろう。また、鎌倉時代の初め、後鳥羽院（上皇）（天皇御在位第82代一一八三～一一九八年、上皇御院政一一九八～一二二一年）が各地の刀鍛冶の名工25名を召されて仙洞御所で太刀を打たせられ、御自らも埒刃（刀身に刀紋を付ける工程）を試みられ、完成した太刀の茎に十六重弁菊花紋を銘に代えて刻まれたこと、そして後に、この菊花紋が皇室（天皇家）の御紋章となったこと、また、後鳥羽院の作刀は「菊の御作」として今に伝えられていることは、周知のとおりであろう。

ところで、靖國神社の境内にも、かつては多くの刀匠を抱え、「靖國刀」と呼ばれる日本刀を鍛造する日本刀鍛錬會の鍛錬場があったことは余り知られていないので、境内奥の相撲場の南にある「行雲亭」（今は茶室に改造されている）の銘板からその由来を抜粋すると、次のとおりである。

「行雲亭は、陸軍省の建築課技師内藤太郎と柳井平八の設計により、昭和八年六月二十五日（財）日本刀鍛錬會の鍛錬所として竣工された建物である。昭和六十二年九月に五つの鍛冶場の全てが茶室に改装されたが、外観は当時のままの優美な姿を残しており、特に屋根上の吹抜けは、鍛錬場にみられる様式で、行雲亭本来の姿を物語っている。（財）日本刀鍛錬會は、明治維新とともに衰退の一途をたどった鍛刀界の復興、国民の愛刀心の向上、そして有事に際した軍刀の整備などを目的に発会。理事長には歴代の陸軍次官があたり、延べ十一名の刀匠と二十一名の先手からなる刀工集団を中心に組織され、終戦までの間、八一〇〇振に及ぶ良質な日本刀を製作し続けた。そこで製作された日本刀は「靖國刀」、刀匠達は「靖國刀匠」と呼ばれ、当初の靖廣・靖徳・靖光をはじめ、陸軍大臣より「靖」の字を冠する匠銘を授与された。また、大正十五年頃には、日本古来のたたら製鉄は途絶え、日本刀の材料となる高品質の玉鋼の入手は困難な状態にあった。そこで、日本刀鍛錬會は、古代から良質の砂鉄を産出する島根県仁多郡横田町に「靖國鑪」を開設し、そこで生産された玉鋼は五十数トンに及んだ。

終戦を迎え、日本刀の製作は一時禁止されたが、昭和二十八年には再開。また、中断していた鑪操業も、昭和五十二年には、靖國鑪の技術を継承し作刀技術の保存を目的とする（財）日本美術刀剣保存協会が「日刀保たたら」として復活させた。そこで生産された良質な玉鋼は、日本刀の材料としてだけでなく、茶の湯の釜や東大寺仁王像修復などにも広く用いられている。」

（飯田正能記）

皇居参賀二題

例年のとおり、暮れと正月、二度の参賀に皇居を訪れた。12月23日の天皇誕生日と1月2日の一般参賀である。いずれも好天に恵まれて多くの人々が訪れた。

○天皇誕生日参賀

天皇陛下は平成24年12月23日、御年79歳の御誕生日を迎えられた。誠に慶賀に堪えないところであり、心より聖寿万歳を祈念申し上げる。

前夜までは寒風が吹き荒れ、時折冷たい氷雨の降る天候であったが、明け方には雨も上がり、曇り空ながらまずまずの日和となった。それでも冷たい風の吹く中を、毎年の嘉例により皇居一般参賀（午前中3回お出まし、午後は記帳のみ）に出掛けた。

今回は第1回のお出まし（10時10分頃）に間に合うようにと、9時30分の正門開扉時刻に合わせて、地下鉄大手町駅から皇居前広場に向かったが、既に検問所前は参賀の人波で一杯であった。今年の一般参賀の人員は、昨年を上回り、記帳を含めて2万8065人に及んだという。若い人や家族連れが多く、特に外国人の多さが目立つ。我が国の皇室に対する敬愛の念は、今や国際的である。しかも、内外を問わず、いずれの人の顔も晴れやかに見える。天候は次第に回復し、時折雲間から日も射し、皇居の緑、それに参賀の人々が手にする日の丸の小旗が映えて美しい。やがて天皇、皇后両陛下を始め皇太子、同妃両殿下、秋篠宮、同妃両殿下の六方が長和殿ベランダにお出ましになると、宮殿前を埋める参賀の人々から一斉に万歳の声が上がり、日の丸の小旗が打ち振られる。これに応えて両陛下並びに皇族方が御手を振られ、にこやかに会釈をされる。皇室と国民を結び付ける最も美しい光景である。

天皇誕生日参賀で御言葉を賜る天皇陛下

その後天皇陛下は、短い御言葉を賜るが、決まって国民の幸せを第一に祈念される。

陛下は、平成24年2月に受けられた心臓手術に触れられて「・・・多くの人々に心配をかけました。現在は普通と変わりなく生活をしていますので、どうか安心してください」と述べられ、また、東日本大震災での被災者支援について、「今日ここに来られた皆さんの中にも被災者のために様々に心を使ってきた人々がおられることと思い、ここに感謝の気持ちを表します。これからも被災者のことを忘れることなく、国民の皆さんの幸せを願って過ごしていきたいと思っています。来る年が皆さん一人一人にとり少しでも良い年となるよう願っています」と述べられた。国民と国家の象徴として努められる真に真摯で崇高な御姿である。

◇

参賀を終えて、皇居東御苑を経、北の丸公園を通り、靖國神社へ向かう。この日は、今上陛下のめでたい御誕生日であると同時に、かの忌まわしい極東国際軍事裁判（いわゆる東京裁判）の判決で、いわゆるA級戦犯として絞首刑を言い渡された（昭和23年11月12日）七士の方々（土肥原賢二、松井石根、東條英機、武藤章、板垣征四郎、廣田弘毅、木村兵太郎）が、巣鴨拘置所において処刑された日（昭和23年12月23日午前0時1分と0時20分）から64年目の命日（65回忌）でもある。いわゆる東京裁判は、昭和21年4月29日の昭和天皇御誕生日（天長節）に始まり（起訴）、当時皇太子殿下であられた今上陛下の御誕生日に終結する（処刑）ように仕組まれた。そして天皇のみならず、日本国民に永久に負い目を忘れることのないよう、東京裁判史観による洗脳を工作したのである。靖國神社参拝を終えて、遊就館前の「ラダ・ビノード・パール博士顕彰碑」に参拝する。この日の顕彰碑には生花が供えられ、大勢の人々、特に若者達が碑前に佇んで熱心に碑文と靖國神社前宮司故南部利昭氏が捧げた建立の「頌」に見入っていた。この碑文と「頌」は、極東国際軍事裁判の不当性と同裁判所判事としてただ一人、全員無罪を主張したインド代表判事パール博士の崇高な使命感を端的に表していると思われるので、再度掲示する。

「　**碑　文**（意見書の結語）

時が熱狂と偏見とを
やわらげた暁には
また理性が虚偽から
その仮面を剥ぎとった暁には
その時こそ正義の女神は

その秤を平衡に保ちながら
過去の賞罰の多くに
そのところを変えることを
要求するであろう
ラダ・ビノード・パール」

◇

「頌

ラダ・ビノード・パール博士は、昭和二十一（一九四六）年五月東京に開設された「極東国際軍事裁判所」法廷のインド代表判事として着任され、昭和二十三年十一月の結審・判決に至るまで、他事一切を顧みる事なく専心この裁判に關する膨大な史料の調査と分析に没頭されました。

博士はこの裁判を擔當した連合國十一箇國の裁判官の中で唯一人の國際法専門の判事であると同時に、法の正義を守らんとの熱烈な使命感と、高度の文明史的見識の持主でありました。

博士はこの通称『東京裁判』が、勝利に傲る連合國の、今や無力となった敗戦國日本に對する野蛮な復讐の儀式に過ぎない事を看破し、事實誤認に満ちた連合國の訴追には法的根據が全く缺けている事を論証し、被告團に對し無罪と判決する浩翰な意見書を公にされたのであります。

その意見書の結語にある如く、大多数連合國の復讐熱と史的偏見が漸く収まりつつある現在、博士の裁定は今や文明世界の國際法學界に於ける定説と認められたのです。

私共は茲に法の正義と歴史の道理とを守り抜いたパール博士の勇気と情熱を顕彰し、その言葉を日本國民に向けられた貴重な遺訓として銘記するためにこの碑を建立し、博士の偉業を千古に傳へんとするものであります。

平成十七年六月二十五日

靖國神社　宮司　南部利昭」

パール博士顕彰碑

◇

○平成24年12月靖國神社社頭掲示の御祭神遺書

平成24年12月の靖國神社社頭掲示の御祭神遺書は、故山本卓眞前会長の兄上、山本卓美陸軍中尉（戦死後二階級特進少佐・陸士56期・仙幼41期）が遺されたものである。山本卓美中尉は、特別攻撃隊八紘部隊・勤皇隊（二式双襲12機）の隊長として昭和19年10月18日、それまで練成・訓練に励まれた福島県原ノ町飛行場（現南相馬市原町区神ケ崎）を出発して、九州、沖縄、台湾経由、フィリピンに向かわれ、昭和19年12月7日、レイテ島オルモック湾の敵艦隊に突入、散華された。その間の日誌を詳しく認められ、戦死後、遺書代わりに両親の元へ送られたし、として遺された（その自筆のコピーは、平成23年2月発行の当顕彰会会報『特攻』第86号に、及びその訳文は、平成20年11月発行の同会報第77号に、いずれも「原町飛行場関係戦没者慰霊祭」関連記事に掲載されているが、同日誌によれば、本遺書は、台湾・台北滞在中に認められたものと推量される。

「遺　書

陸軍少佐　山本　卓美　命

昭和十九年十二月七日

比島レイテ島附近にて戦死

福岡県糸島郡前原町出身

二十一歳

父上様

母上様

卓美ハ

オ先ニ失礼致シマス。

二十有余年ノ間、此ノ上ナク可愛ガッテ頂キマシタ。

山ヨリモ高ク、海ヨリモ深キ養育ノ御恩ニ何等報ユル所ナク、御心配ヲカケ通シテ参リマシタガ、今ヤ御恩ノ万一ニ報ユル時ガ参リマシタ。

光栄アル八紘隊長ニ選バレ、南海ニ水漬ク屍トナルハ男子ノ本懐、只々感謝感激ノ外アリマセン。

念ズルハ　皇国ノ必勝

祈ルハ　皇運ノ無窮

靖國神社デ、オ待チシテ居リマス。

御両親様、幸福ニ御暮シ下サイマス様、心ヨリ祈リ上ゲマス。

昭和十九年十一月三十日

山本卓美」

◇

天皇陛下は、新年を迎えるに当たっての御感想を文書で発表された。

東日本大震災から2度目の冬を迎え、放射能汚染などにより避難先や仮設住宅で過ごしている被災者について「改めて深く案じられます」と心を寄せられた。また、震災対策として「被害の経験を十分に活かした防災教育や街造りが行われるよう願っています」と記され、「皆が被災者に心を寄せつつ、互いに支え合って様々な困難を克服していくよう期待しています」と綴られた。

新年をお迎えの皇室御一家

〈明治天皇崩御百年に当たり〉
様々の新しきこと始まりし
明治の世しのび陵に詣づ

皇后陛下御歌（3首）

〈復興〉
今ひとたび立ちあがりゆく村々よ
失せたるものの面影の上に

〈着袴の儀〉
幼な児は何おもふらむ目見澄みて
盤上に立ち姿を正す

〈旅先にて〉
工場の門の柱も対をなす
シーサーを置きてここは沖縄

◇

○新年一般参賀

大晦日以来三日続きの晴天、一点の雲もない日本晴れ、正に参賀日和である。1月2日は筆者の誕生日でもあって、家族共々朝早めの祝い膳を頂いて家を出た。

新年参賀はさすがに規模が大きい、皇居外苑では、馬場先門、和田倉門、桜田門の三方向から進んできた参賀の人波を各検問所で検査をした後、警官の誘導に従い石橋を渡って正門から入り、鉄橋（二重橋）を渡って宮殿長和殿前の広場に至る。いずれも長蛇の列である。早めにと思って家を出たが、地下鉄駅から検問所まで約20分、検問所から正門石橋前まで約20分、そこから更に広場まで約20分と約1時間を要したため、第1回の御出御（10時20分頃）にようやく間に合った。およそ2万人を収容できるという長和殿前の広場は、手に手に日の丸の小旗を持った参賀の人々で忽ち一杯になった。やはり若者が圧倒的に多く、華やかな雰囲気に満ちている。外国人も非常に多い。観光ツアーと思われる団体も多い。喜ばしいことである。参賀は日本の伝統文化でもあるからだ。

やがて定刻、天皇・皇后両陛下を先頭に、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下ほか皇族方が御出御になられると、一斉に日の丸の小旗が打ち振られ、天皇陛下万歳の歓声が上がり、両陛下と皇族方がお手を振ってにこやかに応えられた。この日の皇族方は、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下、眞子内親王殿下のほか、三笠宮崇仁親王殿下・同百合子妃殿下、高円宮久子妃殿下、承子女王殿下、典子女王殿下、絢子女王殿下の11方に両陛下合わせて13方という、誠に豪華な、華やいだ感じのする御出御であり、皇族方のお健やかな御容姿を拝し、誠に喜ばしい限りであった。取り分け、満97歳と89歳という御高齢の、三笠宮・同妃両殿下には、歩いてベランダに進み出られ、盛んに御手を振られて参賀者に応えられた。三笠宮殿下には、昨年7月に心臓手術を受けられ、御療養中と承っていたところであり、お元気な御容姿を拝し、誠に喜ばしく感動に胸の熱くなる思いであった。

天皇陛下は、「・・・おととしの東日本大震災に当たっては、多くの人々が被災地に赴き、被災者のために力を尽くされ、心強いことでした。これからも皆で被災地に心を寄せて過ごしていきたいと思います。今年が国民一人びとりにとり、少しでも良い年となるよう願っています」とのお言葉を賜った。

過重な御公務の中にあって絶えず国民の上に思いを寄せられる、誠実で優しい陛下の大御心に感動させられた。

今年の一般参賀での両陛下と皇族方の御出御は、午前3回、午後2回の計5回、参賀者数は、昨年よりやや多い7万8760人に達したという。身も心も清められ、晴れ晴れとした思いで宮殿前広場を後にした。

（飯田正能記）

○天皇・皇后両陛下が平成24年にお詠みになられた御歌（宮内庁発表）

天皇陛下御製（5首）

〈心臓手術のため入院〉
手術せし我が身を案じ記帳せる
あまたの人の心うれしき

〈仙台市仮設住宅を見舞ふ〉
禍受けて仮設住宅に住む人の
冬の厳しさいかにとぞ思ふ

〈即位六十年にあたり英国の君に招かれて〉
若き日に外国の人らと交はりし
戴冠式をなつかしみ思ふ

〈沖縄県訪問〉
弾を避けあだんの陰にかくれしとふ

○平成25年宮中「歌会始」の御儀

新春恒例の宮中「歌会始」の御儀が1月16日午前、皇居正殿「松の間」において、古式に則り厳かに行われた。今年の勅題は「立」で、天皇・皇后両陛下の御製・御歌、皇族方のお歌、特に招かれた歌を詠む召人の歌と選者の歌、1万7800首の応募作の中から選ばれた選歌10首（今年の最年少は東京都の太田一毅さん12歳、最年長は北海道の佐藤マサ子さん89歳）が、天皇陛下の御前で披講された。

天皇陛下の御製は、昨年11月、全国豊かな海づくり大会に御出席のため、沖縄県を御訪問の折、恩納村の景勝地「万座毛」の情景をお詠みになられたもので、陛下は、皇太子時代から沖縄独特の短歌「琉歌」にも親しんでおられ、18世紀の有名な琉歌にも登場する恩納岳を万座毛から御覧になられた時の御気持ちを込められたものである。

皇后陛下の御歌は、天皇陛下が昨年2月の心臓手術後に胸に水が溜まる症状が続かれた際、「春になるとよくおなりになります」との医師の言葉を頼りに春の訪れを待たれる中で、その気配を感じられて心が弾まれた時の思いを詠まれたものである。

◇

天皇陛下御製

万座毛に昔をしのび巡り行けば
彼方恩納岳さやかに立ちたり

皇后陛下御歌

天地にきざし来たれるものありて
君が春野に立たす日近し

皇太子徳仁親王殿下お歌

幾人の巣立てる子らを見守りし
大公孫樹の木は学び舎に立つ

皇太子妃雅子殿下お歌

十一年前吾子の生れたる師走の夜
立待ち月はあかく照りたり

秋篠宮文仁親王殿下お歌

立山にて姿を見たる雷鳥の
穏やかな様に心和めり

秋篠宮紀子妃殿下お歌

凛として立つ園児らの歌ごゑは
冬日の部屋にあかるくひびく

常陸宮華子妃殿下お歌

蕗のたう竹籠もちて摘みゆけば
わが手の平に香り立ちきぬ

三笠宮百合子妃殿下お歌

俄かにも雲立ち渡る山なみの
をちに光れりつよき稲妻

高円宮久子妃殿下お歌

冬晴れの雲なき空にそびえ立つ
雪の大山いともさやけき

高円宮承子女王殿下お歌

立ちどまり募金箱へと背伸びする
小さな君の大きな気持

高円宮典子女王殿下お歌

庭すみにひそやかに立つ寒椿
朝のひかりに花の色濃く

高円宮絢子女王殿下お歌

冴えわたる冬晴の朝畦道に
きらきら光る霜柱立つ

◇

召人　岡野　弘彦

伊勢の宮み代のさかえと立たすなり
岩根にとどく心のみ柱

選者　岡井　隆

やうやくに行方見え来てためらひの
泥よりわれは立ち上がりたり

選者　篠　弘

ゆだぬれば事決まりゆく先見えて
次の会議へ席立たむとす

選者　三枝　昂之

すずかけは冬の木立に還りたり
また新しき空を抱くため

選者　永田　和宏

百年ばかり寝すごしちまつた頸を立て
亀は春陽に薄き眸を開く

選者　内藤　明

遠き日の雨と光を身に湛へ
銀杏大樹はビルの間に立つ

◇

○選歌（詠進歌10首、年齢順）

北海道　佐藤マサ子（89）

羽搏きて白鳥の群れとび立てり
呼び合ふ声を空にひろげて

埼玉県　若谷　政夫（84）

ほの白く慈姑の花の匂ふ朝
明日刈る稲の畦に立ちをり

静岡県　青木　信一（71）

自画像はいまだに未完立て掛けた
イーゼル越しの窓が春めく

新潟県　宮沢　房良（69）

何度目の雪下しかと訊ねられ
息をととのへ降る雪に立つ

群馬県　鬼形　輝雄（66）

いつせいに蚕は赤き顔立て
糸吐く刻をひたすらに待つ

新潟県　高橋　健治（65）

吹く風に向かへば力得るやうな
竜飛岬の海風に立つ

福島県　金澤　憲仁（42）

安達太良の馬の背に立ちはつ秋の
空の青さをふかく吸ひ込む

栃木県　川俣　茉紀（22）

ネクタイをゆるめず走る君の背を
立ち止まらずに追ひかけるから

大阪府　瀬利由貴乃（17）

人々が同じ時間に立ち止まり
空を見上げた金環日食

東京都　太田　一毅（12）

実は僕家でカエルを飼つてゐる
夕立来るも鳴かないカエル

（飯田正能記）

平成24年度「回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式」に参列して

評議員　飯田　正能

平成24年11月11日（日）11時30分～12時45分、山口県周南市大津島（おおづしま）・回天記念館の「回天慰霊碑」前において執り行われた本年度の標記追悼式に、当顕彰会理事長代理として参列させていただいた。以下はその所見である。

大津島に渡ったのは初めてであり、もちろん、回天追悼式に参列するのも初めてであるが、回天と筆者との縁は、これまで数回にわたって会報『特攻』にも掲載させていただいたとおりである。

「回天碑」（題字は黒木博司大尉の自筆）

この回天追悼式の由来については、会報『特攻』第81号（平成21年11月発行）及び第82号（平成22年2月発行）に「回天の追憶と祈り（抄その一、その二）」として、大東亜戦争末期に第六艦隊（潜水艦隊）水雷主務参謀として回天特攻作戦担当参謀を務めた鳥巣健之助海軍中佐（海兵58期）の手記の中から抜粋した記事を掲載させていただいたが、ここに要約すると、終戦直後、回天発祥の地・大津島では、回天特別攻撃隊の戦死者及び訓練中の殉職者の霊を慰めるとともに、回天精神を長くこの地に留めようと、残留隊員達の手で基地を見下ろす丘の上（現在地）に「回天碑」を建て（昭和20年11月頃）、10年後の再会を約して故郷へ帰った。丁度その頃、呉の第六艦隊司令部では、司令長官醍醐忠重海軍中将（戦後オランダによる戦犯裁判で死刑の判決を受け、昭和22年12月6日、ボルネオ島ポンチャナックにて法務死）の指示を受けて、連合艦隊司令長官から下賜された機密費を、回天で戦死又は殉職した勇士の霊前に香料として捧げることとなり、司令長官の弔辞と共に、参謀達が手分けして遺族の元へ届けた。

一方、10年後の再会を約して復員した隊員達の有志が、約束どおり昭和30年11月8日、この場所に参集したところ、回天碑はなくなり、台石のみとなっていた。彼らは残っている台石に供物を捧げて慰霊供養を行い、今後毎年11月8日（回天初出撃の日）に、ここに集まって供養を続けることを約した。その後昭和33年11月8日の第4回慰霊祭当日、近くの地中から旧回天碑の一部が露出しているのを発見し、郷友会会員や地元有志の手で旧回天碑全部を掘り出したが、碑は五つに割られており、何者かが、占領軍の目を憚って地中に埋設したものと判明した。そのため、地元徳山市では、回天碑再建が発起され、翌34年1月1日から回天碑再建の募金運動が開始された。そして、地元徳山の人々の熱意により、昭和35年11月20日新回天碑が完工し、翌36年3月26日に除幕式が挙行された。その新回天碑が現在の「回天碑」なのである。

「回天碑」除幕式には、元第二特攻戦隊司令官（回天部隊司令官）長井満少将、元第六艦隊参謀長佐々木半九少将、元第六艦隊先任参謀井浦正二郎大佐、同水雷参謀鳥巣建之助中佐の他、平泉澄博士や多くの遺族、関係者も参列された。それより先、回天基地大津島の地元徳山市では、郷友会会長梅田利一氏を中心に昭和33年2月5日、回天碑再建が発表され、その碑文の起草を回天に関心の深い、平泉澄博士に依頼があった。博士の考えでは、回天碑の題字は何としても高松宮殿下にお願いすべきであるとのことで、結局、博士が高松宮邸に参上してお願いしたところ、殿下はその申入れをお受けにならず、「黒木少佐の遺文の中に『回天』という文字があるのではないか。それを題字にしては」との一案を示された。早速博士が黒木少佐の遺文を調べたところ、3箇所に『回天』の文字を発見し、鳥巣氏の元に送ってこられた。鳥巣氏は早速地元の梅田氏と連絡を取って徳山へ行き、松政旅館に、梅田氏以下関係者の参集をお願いし、東京での経緯を説明し、一同の賛同を得て、回天の発案・開発者黒木少佐の遺文の中の『回天』の文字が題字となったということである。

そして、この追悼式は、今を去る68年前、戦雲暗き昭和19年11月8日、狂瀾を既倒に廻らすべく、文字通り戦勢回天の願いを一艇一身に背負い、遥か南洋の敵艦隊ウルシー基地及びパラオ・コッソル水道攻撃を目指す、初の回天特別攻撃隊菊水隊（伊37号、36号、

47号潜水艦に各4艇搭載の12艇）が大津島基地を出撃した、その日を記念して毎年11月8日前後の日曜日を選んで執り行われているものである。

大津島は周南（旧徳山）市の沖合約10キロの徳山湾に浮かぶ面積約4・73平方キロの細長い小さな島である。この島に昭和19年9月、いわゆる人間魚雷「回天」の訓練基地が開設され、同年11月8日には早くもこの基地から回天特別攻撃隊菊水隊（伊36、伊47、伊37の各潜水艦にそれぞれ4基ずつ計12基の回天を搭載）が、遥か南洋の米艦隊泊地ウルシー環礁及びパラオ・コッソル水道を目指して初出撃した。回天の発案・開発者仁科関夫中尉（海兵71期）も、同年9月7日訓練指導中、機関故障により沈没、殉職した先任の発案・開発者黒木博司大尉（海機51期・海兵70期相当）の遺骨を胸に、伊47潜搭載の回天に搭乗、ウルシー泊地攻撃に成功した（戦後確認された戦果は、艦隊随伴油槽艦ミシシネワ1隻のみ撃沈）。

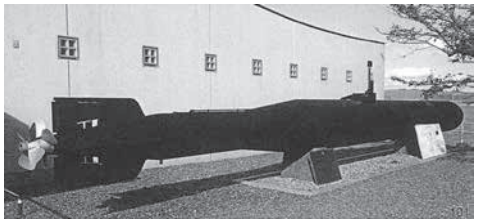
それより先、大津島には、昭和12年に、呉海軍工廠の魚雷発射施設が設けられ、当時日本海軍が世界に誇った高性能の九三式酸素魚雷（頭部に500kgの炸薬を装置し、50ノットの速力で射程距離22Km、36ノットで40Kmという驚異的な性能を持ち、高圧酸素を原動力とする）が開発されるや、その発射試験場として、昭和14年に現在残されているような鉄筋コンクリート造の構造物が建設され、その後、九三式魚雷を推進装置として使用、開発された「回天」の誕生とともに、その訓練基地となった。

この「回天」こそは、黒木、仁科の両青年士官が自ら考案し、自らの命をかけて、狂瀾を既倒に廻らし、戦勢回天を図らんとした特攻兵器である。そして、この生還の望みなき新兵器への搭乗を志願した若者達は数千名に及び、その中から身体強健、意志強固、特に攻撃精神旺盛で、理解力、判断力及び決断力の秀でたる者として選抜され、搭乗要員として訓練基地に着任した者は、海軍兵学校出身士官89名、海軍機関学校出身士官32名、兵科3期予備士官22名、兵科4期予備学生・1期生徒予備士官138名、5期予備学生・2期生徒予備士官50名、水雷科下士官9名、甲飛13期予科練生935名、乙飛20期予科練生100名で、総計1375名に及んだ。

回天特別攻撃隊は、菊水隊に続き金剛隊、千早隊、神武隊、多々良隊と、次々に出撃し、ウルシー、パラオ、ホーランディア、グアム、硫黄島、沖縄方面の米艦隊泊地や機動艦隊集結地の奇襲攻撃を図ったが、防潜網、電探、駆逐艦等による防護隊の守りが堅く、回天及び搭載潜水艦の損害多くして戦果を上げることは困難であった。

そこで、実戦部隊である第六艦隊潜水部隊では、予て強く要望していた回天の洋上攻撃実施について、泊地攻撃に固執する軍令部、聯合艦隊司令部を説得し、ようやく昭和20年4月中旬、回天作戦を洋上攻撃に転換することができ、4月20日及び22日、天武隊（伊47潜、伊36潜、回天各6基搭載）の出撃となった。そして沖縄とウルシーを結ぶ中間付近と沖縄とサイパンを結ぶ海域に待敵、早くも4月下旬から5月上旬にかけて、軽巡1隻、大型駆逐艦2隻、大型輸送船5隻、輸送船2隻撃沈、輸送船1隻撃破の戦果を上げている（未確認）。続いて轟隊、多聞隊の出撃となったが、特に7月14日に出撃

回天記念館全景


記念館前展示の回天１型原寸大模型

回天烈士の石碑

黒木博司・樋口孝両大尉の石碑

追悼式のテント内遺族席の横に見える回天１型模型

追悼式で熱演する原田大二郎氏（左）と山中雅博氏（右）

追悼合唱・メールソレイネ合唱団

奉納太鼓「回天」・大徳山太鼓「回天」保存会

した多聞隊の伊53潜は、同月24日ルソン島の東方西太平洋上において、米軍輸送船団を捕捉、搭載回天により護衛駆逐艦アンダーヒルを撃沈し、更に同隊の伊58潜は、沖縄―パラオの南北線とグアム―レイテの東西線の交差点付近の洋上において、7月29日、米海軍の代表とも言うべき大型戦艦インディアナポリス（沖縄攻略作戦の最高指揮官スプルーアンス大将が乗艦し、沖縄戦に参加。特攻機の体当たり攻撃で大破し、慶良間諸島内で応急修理の後、サンフランシスコに回送、突貫工事による大修理を終え、広島と長崎へ投下する原爆を搭載して出港、マリアナ諸島テニアン港に原爆を揚陸後、レイテ方面へ単独航行中であった。艦長マックベイ大佐は戦後軍法会議にかけられて有罪とされ、その後自決した）を撃沈（魚雷攻撃）している。

しかし、それらの戦果よりも米軍に与えた精神的打撃は大きかった。「海中の見えない脅威、回天」として米海軍に恐れられ、停戦交渉の我が軍使に、マッカーサー司令部のサザーランド参謀長が「回天を積んだ潜水艦は太平洋上にあと何隻残っているか」と真っ先に尋ね、10隻程いると聞くや、「それは大変だ、一刻も早く戦闘を停止してもらわねば」と顔色を変えたほどであったという。

回天作戦による出撃搭乗員は延べ１４８名、回天搭載出撃潜水艦は延べ３２隻であったが、うち回天出撃搭乗員の戦死者は80名で、その他訓練中の事故による殉職者15名、基地進出中輸送艦沈没による戦死者7名、基地空襲による被弾戦死者2名、終戦後基地において自決した者2名を合わせ計１０６名の搭乗員が戦没した。また、出撃回天搭載潜水艦の乗組員８１２名、整備員35名を始め基地進出中輸送艦沈没による乗組員、基地整備員等、戦没者は合計１２９９名に及んだ。

大津島の「回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗組員追悼式」は、今回から「回天顕彰会」の主催により、地元周南市及び有志の全面的協力による企画、運営の下に執り行われた。従前催事の主体であった戦友会、郷友会等、会員の高齢化によるものである。しかし、この追悼式はすっかり地元に根付いた感があり、前夜来風雨波浪警報が出る程の悪天候にも拘わらず、御遺族約50名を始め参列者は約４００名に及び、誠に厳粛、盛大かつ心の籠もった追悼式であった。地元青年合唱団の追悼の歌合唱、献吟、大徳山太鼓・回天の奉納等のほか、特別ボランティア出演の俳優原田大二郎氏による回天烈士手記朗読は、歌手・バイオリン演奏家山中雅博氏の歌唱と演奏を交えての熱演により強く胸に迫るものがあった。

式典の終わる頃には雨も小降りとなったので、訓練基地・魚雷発射試験場跡を訪ねることにした。回天運搬用の２４７ｍのトンネル、発射場跡等は良く保存されて当時の様子を偲ばせるものがあった。折しも切り立った海岸の岩や岸壁に打ち寄せる波の響き、発射場を吹き抜ける風の音が、鬼哭啾々として耳朶に触れ、恰かも烈士の情念の如く胸を打つ。

国を思ひ　死ぬに死なれぬ益良雄が
友々よびつつ　死してゆくらん

（昭和19年9月6日、訓練中に沈没した回天の内壁に書き遺した黒木博司大尉の辞世の句）

大君の　醜の御楯と出で立つに
後見ん心は　御代の曙

（昭和19年11月19日、ウルシー泊地攻撃直前、回天搭載潜水艦伊47号内で認めた仁科関夫中尉の遺詠）

回天誕生

1943年(S18)夏、日本の敗退が続く中、二人の青年士官が戦局を逆転するには体当たりによる特攻作戦しかないと、人間魚雷を構想。その後、戦局はさらに悪化し、海軍省はついに試作兵器を完成させ、1944年(S19)年8月、正式兵器として採用された。祖国を守りたいとの一心から、特攻兵器「回天」は誕生したのである。そして同年9月、試験発射場のあったここ大津島に回天基地が開設され、全国から多くの若者たちが集まってきた。

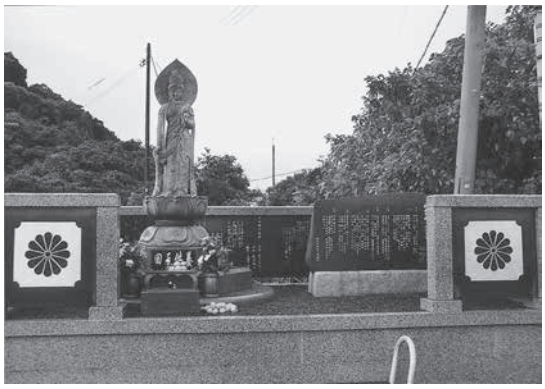
訓練中殉職した黒木大尉の事故報告

魚雷発射訓練場

トンネル入口

魚雷発射施設

トンネル出口



大津島基地入口近くの観音像

回天訓練基地

さらば祖国

出撃の朝。隊員たちは、多くの戦友に見送られながら桟橋へと歩いていく。隊員たちは湾内に停泊している潜水艦に乗り込んだ。「出港」の合図があがり、回天を搭載した潜水艦はわずかに白煙を残し、音もなく進んでいった。

隊員へ別れを告げ桟橋へ

"帽振れ"に送られて出撃する潜水艦

遺書

戦友に別れを告げる隊員

艦上より訣別の礼

■出撃記録

隊名	搭載潜水艦	出撃基地名	出撃年月日	作戦海域
菊水隊	イ36・イ47	大津島	19.11.8	ウルシー・パラオ方面
菊水隊	イ37（未帰還）	大津島	19.11.8	ウルシー・パラオ方面
金剛隊	イ56	大津島	19.12.21	作戦変更により帰役
金剛隊	イ47	大津島	19.12.25	ホーランディア方面
金剛隊	イ36・イ53・イ58	大津島	19.12.30	ウルシー・パラオ沖通行禁止
金剛隊	イ48（未帰還）	大津島	20.1.9	ウルシー
千早隊	イ368（未帰還）	大津島	20.2.20	硫黄島方面
千早隊	イ370（未帰還）	光	20.2.20	硫黄島方面
千早隊	イ44	大津島	20.2.22	作戦変更により帰役
神武隊	イ58	光	20.3.1	作戦変更により帰役
神武隊	イ36	大津島	20.3.2	作戦変更により帰役
多々良隊	イ47	光	20.3.29	作戦変更により帰役
多々良隊	イ56（未帰還）	大津島	20.3.31	沖縄方面
多々良隊	イ58	光	20.3.31	作戦変更により帰役
多々良隊	イ44（未帰還）	大津島	20.4.3	沖縄方面
天武隊	イ47	光	20.4.20	ウルシー、沖縄中間
天武隊	イ36	光	20.4.22	サイパン、沖縄中間
振武隊	イ367	大津島	20.5.5	沖縄方面
轟　隊	イ361（未帰還）	光	20.5.23	沖縄方面
轟　隊	イ363	光	20.5.28	作戦変更により帰役
轟　隊	イ36	大津島	20.6.4	マリアナ
轟　隊	イ165（未帰還）	光	20.6.15	マリアナ
多聞隊	イ53	大津島	20.7.14	西太平洋上
多聞隊	イ58	平生	20.7.18	西太平洋上
多聞隊	イ47	光	20.7.19	作戦変更により帰役
多聞隊	イ367	大津島	20.7.19	作戦変更により帰役
多聞隊	イ366	光	20.8.1	西太平洋上
多聞隊	イ363	光	20.8.8	損傷により帰役
神州隊	イ159	平生	20.8.16	8月18日帰役

回天の追憶と祈り（抄その五）

鳥巣　建之助

「編注・筆者は海軍兵学校58期の海軍中佐で、昭和5年海兵卒、水雷学校高等科、潜水学校乙種、甲種などを修了し、呂65潜、伊165潜の両艦長、第11潜水戦隊参謀を歴任。19年海軍大学校甲種学生を経て第6艦隊水雷主務参謀となり、戦争末期には回天特攻作戦担当参謀を務めた。戦後は回天や潜水艦に関する多くの著書を執筆されたが、実は、鳥巣さんは海兵に入られる前1年間、編者と同じ旧制福岡高校に在学しておられる。修猷館中学から将来の学者を目指して福岡高校理科（3回生）に入学されたが、父親から「男の兄弟が多い中で一人も軍人を出していないのはお国に対して申し訳ない、お前が軍人になってお国のために奉公してくれないか」と懇願されて、海兵受験を決意したとのことである。したがって、旧制福高の同窓生に準じた扱いで、同窓会の会合にも度々出席されたし、卓話を拝聴したこともある。

表題の小冊子は、平成11年5月、同窓会月例会の卓話（演題「私の海軍生活の思い出」）の際に頂いたもので、その前年、鳥巣さんが卒寿を記念して纏められた私家版（A5判58頁）で、特に、回天特攻隊員の慰霊顕彰に関して書き残された貴重な資料でもあると思われるので、その一部を紹介させていただいた。既に本誌『特攻』第81号（平成21年11月発行）、第82号（平成22年2月発行）、第84号（平成22年8月発行）及び第93号（平成24年11月発行）に、それぞれ所要の箇所を掲載済みである。」

◇　◇　◇

四　回天の出現とその戦法（菊水隊）（続）

○菊水隊作戦の経過と作戦論争

まず、パラオのコッソル水道へ向かった伊三七潜から書き始める。

伊三七潜は戦争中の昭和十八年三月竣工の新鋭艦で、十八年六月からペナンを基地としてインド洋上で交通破壊戦に従事していた。当時、艦長は大谷清教（49期）中佐であったが、十八年十二月までの期間に、次の戦果を上げている。

・18・6・16イギリスのタンカー、サン・アーネスト（8078t）撃沈
・18・6・19アメリカ船ヘンリー・ノックス（7176t）撃沈
・18・10・23ギリシャ船ハーネロメニ（3404t）撃沈
・18・11・21ノルウェーのタンカー、スコーシア（9972t）撃沈

次いで、18・12・27中川肇（50期）艦長と交代、同じくインド洋で交通破壊戦を実施した。

・19・2・22イギリスのタンカー、ブリティッシュチバリ（7118t）撃沈
・19・2・25イギリス船スーテ（5189t）撃沈
・19・2・29イギリス船アスコット（7005t）撃沈

この後艦長は河野昌通（52期）、次いで19・10・11神本信雄（56期）に代わり、回天特別攻撃隊菊水隊に加わって、パラオのコッソル水道へ向かった。

19・11・8回天四基を搭載して出撃したが、連絡なく消息を絶った。「米海軍駆逐艦作戦史」によると、次のように記録されている。

「十九日午前八時五十八分（日本側時間八時十八分）コッソル水道西口で防潜網を展張していた設網艦ウィンターベリーが潜望鏡を発見し、警報を出した。そこでコッソル水道に停泊待機中の護衛駆逐艦コンクリンとマッキイ・レイノズルの二隻が直ちに出動した。午前十時五十五分、両艦が現場に到着してみると、上空に哨戒飛行機が飛んでおり、潜水艦の潜在海面ははっきり限られていた。二隻はこの海面を執拗に掃海索敵した。午後三時遂にソナーが潜水艦を捕捉した。続く二時間ヘッジホッグ攻撃が間断なく続けられた。マッキイ・レイノズルが三回攻撃を行ったが反応はなかった。次いで、コンクリンが四回目、五回目の攻撃を加えた。だがこれも無効に終わった。ところが、マッキイ・レイノズルの六回目の攻撃が遂に命中した。

ものすごい泡が湧き上がり、大爆発が海を鳴動させた。レイノズルの水中測的兵器は狂ってしまったが、三分後更に深々度爆雷を投下した。にぶい爆発が海底から盛り上がり、重油や船体の破片が海面に浮かび上がってきた。

伊三七潜は予定攻撃の前日、雄図空しく悲壮な最期を遂げた。

次は伊三六潜につき要点だけを記載する。十五潜水隊司令揚田清猪大佐（50期）が乗艦している伊三六潜は、海兵出身者ではなく神戸商船学校出身の寺本巌少佐が艦長であった。

ウルシーへの進撃中、敵飛行機のため何回も潜航を余儀なくされ、そのため充電を充分やることができず、最後の回天整備も思うに任せなかった。単独奇襲と異なり、被発見のため僚艦の作戦に影響を及ぼすことも考え、潜航のまま発進点に進入していった。

当時の装置では、四基の回天のうち

二基には艦内との交通筒がなく、搭乗員を乗艦させるためにはどうしても浮上しなければならない。

二十日零時過ぎ、潜水艦は敵前で強行浮上し、三号艇、四号艇の今西太一少尉、工藤義彦少尉の両人が、それぞれの艇に搭乗するため、司令塔から上甲板に出、回天の上部ハッチを開いて艇内に入り、整備員がハッチを閉め、大急ぎで艦内に飛び込み、潜水艦は再び急速潜航するという、誠に手間ひまのかかる、しかも危険極まることをやらねばならなかった。潜水艦は五十米の海中に潜航し、進撃を続けたが、午前三時、一号艇、二号艇の吉本健太郎中尉と豊住和寿少尉は交通筒を通って乗艇した。

午前四時過ぎ、マーシュ島の百五度九・五カイリに進入し、いよいよ発進作業にかかった、ところが一号、二号の両艇ともどうしたことか架台に密着して発進できない。四号艇は艇内への浸水が起こり、これまた発進不能となった。

三号艇今西少尉は、発進直前電話連絡が不良となり、最後の言葉がよく聴き取れなかったが、午前四時五十四分発進した。他の三艇も引き続き発進に努めたが結局駄目だった。一、二号艇の両人は下方ハッチから艦内に戻ったが、四号艇の少尉の場合は問題であった。既に明け離れたウルシー環礁の北東至近の距離で急速浮上し、大至急工藤少尉を艦内に収容すると深々度に潜入し、三号艇の攻撃効果の聴知に努めた。午前五時四十五分、モグモグ島南方方向に大爆発一を、続いて六時五分、誘爆音らしい音を確認した。

この後伊三六潜は対潜部隊や飛行機の制圧に遭い、窮地に追い詰められたが、九死に一生を得て生還できた。

折田善次艦長指揮の伊四七潜はあらゆる点で幸運であった。詳細は省略するが、搭乗員は黒木大尉の遺骨を抱いた仁科関夫中尉、福田斉中尉、佐藤章少尉、渡辺幸三少尉であった。四基の回天は順調に発進し、米海軍部隊出撃のためにたまたま開かれていた港門を通過し、ウルシー礁内に潜入することができた。結果は油槽艦一隻の撃沈であった。

史実を見よう。アメリカの海軍大佐ウォルター・カリッグ著『太平洋の勝利』、セオドア・ロスコウ著『米駆逐艦作戦史』、海軍少将リヤー・カーター著「豆と弾丸と重油『太平洋海上補給戦記』などから引用綜合したものを、拙著『人間魚雷特攻兵器「回天」と若人たち』（新潮社刊）に書いている。

また当時、ウルシーに停泊していた戦艦ノースカロライナ艦長ファリオン大佐は「ウルシー停泊中の艦船乗員は、視察とか水泳とか一人当たり三本のビールとか、ご苦労な甲羅干しなどのために、よく海岸を利用していたが、これらは環礁が安全だと考えられていたためで、驚くほど盛んになっていた。ところが、この事件で非常な動揺を彼らに与えた」と言っている。

また、戦闘部隊指揮官シャーマン提督は「我々はあの日終日、そして次の日も、今にも爆発するかもしれぬ火薬箱の上に坐っているような戦々恐々たる感じであった。休養を楽しむどころか、洋上の方がどれだけ安全かわからぬとさえ思った」と述懐している。

さて、この菊水作戦につき「高松宮日記」第七巻六〇六ページに、次の記録がある。

「二十日、ウルシー攻撃、伊47四基、伊36一基発進、空母一～二、戦艦一～二、特設空母一撃沈」

これは、十九年十一月二十日、第六艦隊司令部が報告したものの写しであるが、六艦隊通信参謀は、ウルシーにおける敵信の状況と伊47潜艦長の報告などを総合判断し、上司の許可を得て発信したものであるが、日本海軍が犯し続けたと同じ誤りをやったものである。

史実は油槽艦ミシシネワ一撃沈であったが、アメリカ海軍に与えた心理的影響は絶大であった。

五　作戦論争と研究会

菊水隊による回天の最初の奇襲は、予定通り十一月二十日に行われたことは、敵信情報の傍受などで大体わかった。そして二十三日には伊三六潜と伊四七潜の戦闘速報を見た。ここで明確になったことはまず、伊三七潜が消息を絶ったこと、伊三六潜の回天作戦は失敗であり、伊四七潜は大戦果を上げたらしいということであった。

第六艦隊の水雷参謀で回天主務参謀である私にとって、問題だったのは伊三七潜の局地作戦中の喪失と、伊三六潜の失敗の方が先で、伊四七潜の戦果には多くの疑問があり、他の人々のように有頂天にはなれなかった。その理由は、伊四七潜の戦果は甘すぎるし、後が怖いと思ったからであった。

もちろん戦後分かったことであるが、戦果は発表と全くかけはなれていた。

特に私の最大の不安は、お目出度い連中が柳の下の泥鰌の失敗を繰り返すことであった。

昭和十九年十二月二日、呉在泊の旗艦筑波丸で、菊水隊の研究会が開催さ

れることになった。

軍令部、軍務局、潜水艦部等の中央主務者、聯合艦隊潜水艦参謀、潜水学校首席教官、同戦術教官、揚田第十五潜水隊司令それに六艦隊の先任参謀、水雷参謀など九名が研究会開催の約一時間前、作戦室に顔を揃えていた。

大佐と中佐で、事実上日本潜水艦の軍令、軍政、教育、作戦などの実務を担当している人々であるが、必然的に今度の作戦の公表を何日にするか、今後の作戦は如何にすべきかが議論されることになった。

「二十年正月を期して、菊水隊作戦のことを公表されてはと思うのですが」

この席では最後任の回天担当参謀ではあるが、実施部隊の回天担当参謀である私が提案した。

「いやまだその時期ではない。この際は見送るべきだ」

と軍令部の藤森参謀が反対した。

「なぜ発表の時期ではないのですか。敵はすでに今度の作戦の全貌を掴んでいるものと考えても間違いないと思います。いまさら秘密にしていてもはじまらないし、回天隊員の壮烈な武勲を全国民に一日も早く知らせるべきではないでしょうか」

神風特攻の奮戦が公表され、全国民に異常の感動を与えている今、人間魚雷による水中特攻のことも知ってもらい、全国民に海軍の必死の決意を知ってもらうことは決して徒爾ではないと思った。また戦死した勇士の遺族に一日も早く知らせるべきだと考えたからであった。

「いや、敵は今度の攻撃がどこからきたか、わからないかも知れぬじゃないか」

「冗談じゃない。水中から攻撃されたことがまだわかっていないなど考える方がよっぽどおかしいのではないですか、すでに欧州戦線でも、人間魚雷に類するものが出現しているという情報もあります。従って機密の保持は意味がないと思います」

「いや、敵が知ってしまったと考えるのは早計だ。まだまだ機密を保持し、次の作戦を考えるべきだ」

この頃、すでに霞ケ関と日吉で、同じ要領の作戦を来年早々実施する方針が決まっていたようである。もちろん、六艦隊では知らなかった。また戦後の戦史を見ると、十一月二十日の在泊アメリカ海軍は潜望鏡や環礁に乗り上げた回天を確認していたのである。

論争は激しくなり、私はややむきになっていた。

「いや、菊水対作戦の全貌は、敵は完全に知ってしまったと考えるべきで、従って、敵は益々厳重な警戒をすることは必至であります。もし、これからも同じような局地奇襲作戦をやっても、成功の算は極めて少ないと言わざるを得ません。また、戦果の確認も困難であるし、爆発音を聞いたからといって、戦果が上がったと考えるのは早計で、防潜網に引っかかる場合、リーフに乗り上げる場合などもあります。とにかく同じような作戦の繰り返しはやめるべきだと思います」

私は必死になって同席の人々に説いた。しかし、私の言に賛成する人は一人も出なかった。

回天の整備や訓練の現状を最もよく知っている私であったが、彼らは全く理解してはくれなかった。

回天は動かない艦船を攻撃する兵器、すなわち局地で使用する奇襲兵器という観念が軍令部、海軍省、聯合艦隊、第六艦隊の上司らに固まっているようであり、洋上で活用すべしという私の考え方は論外とさえ考えられていたようである。

ここでアメリカ側の対策を、戦後公表されたアメリカ戦史で見てみよう。

まず水中を潜ってくる「回天」を発見しているし、リーフに乗り上げたものもある。また米技術部は「回天」の残骸を綿密に調査している。更に多量の防潜網が取り寄せられ、各艦の両舷に敷設する対魚雷網も広く採用された。「第二次世界大戦中の米海軍兵器部」という資料によると、ウルシーにおける対魚雷網の合計は二万一千メートルにも及んでいる。

研究会開催の時間も迫り、論争は打ち切られた。

研究会は、伊四七潜艦長、伊三六潜艦長の作戦報告が主体であったが省略する。私は会場に掲げられた戦果一覧表を冷めた目で見ていたが、今後の軍令部や聯合艦隊の回天使用作戦に不安を感ぜずにはおれなかった。

研究会後、伊四七潜先任将校大堀正大尉が私に封書を渡した。開いてみると、突撃前夜、仁科中尉がしたためた次の遺書があった。

君の為　只一筋の　誠心に
　当りて砕けぬ　敵やはあるべき
大君の　醜の御楯と　出で立つに
　後見ん心は　御代の曙

十一月十九日

海軍中尉　仁科関夫

鳥栖中佐殿

（この墨書は現在、徳山市（現周南市）大津島の回天記念館にある）

私は遅れて研究会に出席した大津島

回天部隊の指揮官（兼第二特攻戦隊参謀板倉光馬少佐（海兵61期）に今後回天の洋上使用に対する研究と訓練を要望した。

昭和二十年一月決行された、六隻の潜水艦による「回天特別攻撃隊」金剛隊作戦は、軍令部、聯合艦隊の合作によるものであるが、完全な失敗に終わった。

そしてその後回天戦は硫黄島作戦、沖縄作戦に使用されたが、すべて局地奇襲作戦に終始し、惨憺たる結果に終わった。

私の軍令部や聯合艦隊に対する不信と嘆きは尽きなかった。

六　潜水戦隊、回天戦の不振

昭和二十年に入ると、救国兵器と目されていた回天作戦は、軍令部と聯合艦隊の合作？ですべて局地作戦に使用された。

攻撃予定日　潜水艦　攻撃地
一月十一日　伊36　ウルシー泊地
一月十一日　伊47　ホーランジア泊地
一月十一日　伊53　パラオ・コッソル水道
一月十一日　伊56　セアドラ泊地（アドミラリティ）
一月十一日　伊58　アプラ港（グアム）
一月二十日　伊48　ウルシー泊地

一月十一日予定の五隻の内、伊36、伊47、伊53、伊58の四隻の突入決行、但し戦果不明のまま。

伊56は攻撃の機を得ず。

伊48の一月二十日の奇襲は失敗し、消息を絶った。（米側記録によると、一月二十三日掃蕩部隊コンクリン・コーベジャー・ラビィ三護衛駆逐艦により撃沈されている。）

次の作戦は硫黄島の戦いである。

回天特別攻撃隊千早隊の伊44、伊368、伊370と呂43の四隻が進撃したが、呂43と伊368、伊370の三隻は消息を絶ち伊44のみが帰投した。

最後の決戦、沖縄戦では、伊8、呂41、呂46、呂56、呂109の五隻と回天特別攻撃隊多々良隊の伊47、伊44、伊56、伊58の四隻が沖縄海域へ突撃していった。そして伊8以下呂号四隻と回天搭載の伊44、伊56の七隻はすべて米海軍の潜水艦掃蕩を主目的とするキラーグループによって海底に葬られ、伊47は大被害を受け半死半生で帰投、伊58のみ無事帰投した。

以上、昭和二十年の潜水艦戦をまとめてみると、回天特別攻撃隊金剛隊、千早隊、多々良隊の回天作戦に従事した潜水艦の実数九隻のうち、伊48、伊368、伊370、伊44、伊56の五隻が沈没し、普通潜水艦伊8、呂43、呂41、呂46、呂56、呂109六隻、即ち実数十五隻のうち、生き残ったのは次の四隻のみとなってしまった。

伊36、伊47、伊53、伊58

この昭和二十年の初め頃、日本海軍には十二隻の輸送用潜水艦（一等潜水艦T型）が次々に竣工し、戦列に加わり始めていたが、これは孤島や離島に孤立する陸海軍部隊に戦争資材を補給するための泥縄式潜水艦であった。攻撃兵器は皆無に等しく、速力、潜航深度なども劣小で、時代遅れの潜水艦と言うべきものであった。これらの潜水艦を輸送用に使うだけでなく、戦争用に使用するため、急遽五基の回天を搭載できるように改装した。そして硫黄島の千早隊以後、振武隊（伊367）、轟隊（伊361、363）多聞隊（伊363、366、伊367）などで、二十年五月、六月、七月、八月と使用された。しかし、何と言っても基本的潜水艦性能は劣弱で大きな期待は持てなかった。

やはり伊36、伊47、伊53、伊58の四隻が希望の星であった。このわずか四隻の潜水艦をいかに活かして使うか、これは沖縄戦後の私にとって命がけの仕事であった。

眠られぬ幾夜かが続いたが、その頃、伊36と伊47が間もなく出撃可能になりつつあった。そして間もなく、作戦命令が下令されるのは当然であった。

もしここで聯合艦隊からか、第六艦隊長官から命令が出されれば、沖縄への出撃は必至であり、これまでの二の舞になることは目に見えていた。私は一刻の猶予も許されぬと思った。

（編注・この後第六艦隊では、昭和20年4月16日、呉の司令部庁舎での幕僚会議において、予てより鳥巣水雷参謀（回天主任参謀）が主張し、提案してきた回天の米軍泊地奇襲作戦から洋上作戦への転換がようやく決定されて三輪茂義長官（海兵39期）の決裁を得、聯合艦隊司令部（日吉）の了承も得て直ちに、同司令部を通じて大本営海軍軍令部（霞ケ関）に伝えられ、反対する担当部員を説得し、次に出撃予定の伊47潜と伊36潜の2隻に限りということで、回天特別攻撃隊の洋上出撃が認められた。その結果早速、回天特別攻撃隊天武隊が編成されて洋上出撃となり、大きな戦果を上げるのであるが、この項に関しては、既に平成22年8月発行の会報『特攻』第84号に掲載済みである。）

戦後政治が招いた領土問題に思う

陸士60期　横地　光明

「編注・本稿は公益財団法人偕行社の機関誌『偕行』の付録「花だより」平成24年10月号及び11月号の60期生欄に連載されたものであるが、御了承を得て転載させていただいた。」

◇　◇　◇

はじめに

昨年11月メドベージェフ大統領は我が国の抗議を歯牙にもかけず北方領土を訪問し、その実効支配を強めんと、返還交渉の見通しを暗くしている。然るところ最近中韓は恰も連携をするがごとく、韓国李明博大統領が竹島に上陸し（8月）、国を挙げて領有を叫び、尖閣諸島領有を主張する香港の活動家が魚釣島に不法上陸した（同15日）。

政府がロシア政府に抗議すると「戦争の結果だ、寸土も渡さない。日本の反応などどうでもよい」と軽くあしらわれ、韓国には首相親書を送り、国際司法裁判所（ＩＪＣ）への提訴を働きかけたが国際慣例を無視してこれを一蹴する非礼を受けた。中国には不法上陸者を逮捕したが、即時強制送還することに留め「尖閣諸島は固有の領土で、領土問題は存在しない」と主張し、「平穏かつ安定的維持管理」を名目に「現状維持」または「棚上げ」で事態収拾を図らんとしているが、中国世論は激昂し中国政府も尖閣諸島を「核心的利益」と言いかねない情勢にあり、今後同島の領有化を狙い手段をエスカレートする可能性が高く、米国の識者はその武力使用の可能性を警告している（議会証言等）。

中国を刺激しない配慮から同島への上陸を禁止する「平穏かつ安定的維持管理」と東シナ海ＥＥＺ内の油田開発の禁止は、恰も「父祖伝来の美田を隣人から俺のものだと言いがかりを受け、耕作をためらうようなもの」で、自ら領有権を制限し、却って中国の主張を強めるもので、極めて危ない施策であり、また「現状維持論・棚上げ論」は中国に機会作為の条件を与えるもので、決して良策ではない。

かように四周の隣国から固有の領土を侵され、又侵されんとしている国は世界に例を見ず、政府の不当に弱い対応は中露韓の不法行為拡大の悪循環を生んでいる。

この我が国が独り隣国からかかる国際的酷い苛めに会わされている哀れな状況に置かれる所以は何故であろうか。答は明白だ。その第1は戦後「日本国民は平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼し、われらの安全と生存を保持しようと決意した」とするような占領憲法を戴く非現実的夢想的世界観を抱き、国際関係が恰も「法と正義」で律せられると空想してきたからである。現実の国際政治は「権力闘争であり」（J・H・モーゲンソー：国際政治）、「外交は軍事力の相対関係に支配される」（E・H・カー：危機の20年）「弱国には外交はない」ことを政府も国民も厳しく認識しなければならない。このことは李明博大統領が日本の抗議を一蹴するに際し、「日本は弱くなった。今は恐れることのない木偶坊だ」と述べたことに象徴される。また経済力・軍事力を急速に増大し中華思想に基づき世界覇権を目指して「戦略的国境論」（解放軍報に掲載された地理的国境は軍事力で動くとする帝国主義的理論）を信じ、現に「２０５０目標置地図」（最近中国外務部からリークされた版図拡張構想図）を持つ中国が「日本は尖閣で本気で一戦を交える勇気があるか」、「我々に勝てると思うのか」、「日本は尖閣を返せ、北海道に引っ込め」と力で押してくる姿勢を見れば明らかである。第2には、戦争の責任と過失は平和条約で清算されているのに、未だに自虐史観と贖罪意識を克服できずハンディキャップ国家論を脱しきれないでいるからである。

従って、政府が「毅然として対処する」とし、首相が「不退転の覚悟で臨む」と表明しても、その力の準備も無く言葉だけで具体的な実効を伴わず、加えて政治・輿論が「冷静に、大人の態度で、大局を過るな、ナショナリズムに走るな」とブレーキをかけては、関係国に「日本は何も決断出来ない」と手の内を読まれ、一方的受け身にさらされ、領土問題はますます危うくなる。

領土の安全は主権を確立し、国民の生命財産を守り、経済的権益（航海の自由・水産活動・海底資源）を守り、安全保障上の脅威接近を防ぐための最大の国益である。然し我が国の外交交渉は自虐史観と贖罪意識を背負いながら法と正義だけが頼りの弱い立場で話合いに依存してきた。だが、関係隣国はいずれも領域不可侵、威嚇や武力行使禁止の国際法（国連憲章や国連海洋法条約等）や相互不可侵、領土保全、相互平等、平和友好の条約等（日中平和友好条約、日韓基本条約、大西洋憲章、カイロ宣言等）を無視違反し、武力を背景に押しまくってきている。中国等の「平和的台頭だ。決して覇権を求めない。他国の領土を占領したり、

領土問題を戦争で解決することは絶対にしない。対立・紛争は話し合いで解決する」との表向き声明を一方的に信頼するの愚かでしかないし、プーチンの甘い誘いに誘惑されてはならない。

勿論徒らに、過剰な反応を採ることは建設的でない。然し、相互主義の範囲で道義と法的権利は区分し実効ある行動をとらねばならない。苛めにあっている者は個人でも国家でも基本的には弱いからであり、従ってこれを跳ね返せるだけ自ら強くなるか、それができなければ、信頼できる強い友人・友国を作り、これに頼むか、あるいは声を挙げて周辺乃至は国際世論に訴え、あるいは社会・国際的権威（国際機関）の関与を求めなければならない。同時に国民も領土問題に正しい視点を持ち、挙国一致して政府の外交施策を支持することが肝要である。

以下、竹島、尖閣、北方領土、沖の鳥島が我が国固有の領土である根源と関係者の不当な行為と主張を確かめ、新たな領土問題解決への対応の方策を探ろう。

当該各島が我が国固有の領土たる明明白白の権原

尖閣諸島、竹島及び北方4島は領有の意志を示し、歴史上実効支配してきた我が国の領土である権原は揺るぎなく、中国、韓国、ロシアの主張は全く根拠がなく不当である。国民はこのことをよく理解確信し、政府は相手国に強く主張し、国際社会に広く訴えなければならない。

◎竹島領有の根拠

島根県隠岐郡隠岐の島町（元五箇村）竹島官有無番地の竹島は、隠岐の島から北西157キロの日本海上にある。二つの岩の東島（女島）と西島（男島）からなり、日比谷公園よりやや大きい面積（0・23平方キロ）を有する。韓国は1954年以来不法占拠し武装警備隊（約40人）を置き、住民（漁師夫婦2名）を住まわせ、船の係留施設・ヘリポートを作り、海軍艦艇、海洋警備隊が厳重に警備し、多くの観光客（15万人）を送り込んでいる。今回（8・10）李大統領が上陸したが、韓国の不法領有主張のため、EEZが確定できず、水産操業がトラブり、日本のICJ（国際司法裁判所）提訴を韓国は拒否し（1954、1962、2012）、日本政府は時効阻止のため毎年口上書を送致している。

本島は、徳川幕府成立間もない元和4年（1618）、米子の大谷・村川両家に鬱陵島渡海竹島漁業免許（葵の紋船印）を与え、竹島では船係り漁撈し、元禄5～9年（1692～6）領土紛争（竹島一件：安龍福来日等）の結果、鬱陵島の韓国帰属を承認したが竹島の地位に変更はなく、アシカ漁等を営み、明治38年に至り領土に編入し（無主地先占：Occupation）、短期間私企業が漁業経営した後すぐ海軍が使用したが、李朝からの異議はなかった。この間出雲藩士斎藤某は竹島が日本の地とする「隠州視聴合記」を書き（1667）、長久保赤水の「改正日本輿地行程全図」（1779）始め竹島の位置を正しく記した多くの古書がある。

終戦後は、占領軍がマッカーサーラインを設定し（SCAPIN 667・1033）日本漁民は接近を排除され、射爆場として使用されていたが、領土権の帰属に関わるものではなかった。対日平和条約（1951）策定の段階で韓国は同島が日本の植民地政策で奪取されたものだと米国国務省に強く要求したが、韓国支配の事実なしとしてこれを却下（国務次官補ディーン・ラスク：ラスク文書）した。すると韓国は無法にも李承晩ラインを設定し（独島と呼称1952・1・18）日本漁船を拿捕し、漁民を殺傷・抑留し、1964年には官憲を常置し、海保船の接近を銃撃し上陸を阻止した。然し日韓基本協定（1965）に伴う協定では同島の帰属紛争は外交仲介により解決することで合意した。またJ・V・フリート（朝鮮戦争当時の第8軍司令官、大将、韓国軍の父）米大統領特命大使が韓国にICJによる解決を勧告した（1964）。

韓国は竹島は于山国（島）で512年新羅がこの住民を征服し（三国史記：1145）、戸数15、居人85で、その3人を連れ大竹・水牛皮・苧（麻）・綿を採取し献じた古文書（太宗大王実録）があるとするが、同島は岩で居住不能で植生はなく事実に反する（明確な比定誤り、多分鬱陵島）、李朝は450年間（1438年から明治17年：1884年まで鬱島の空島政策を採り、その遥か沖（87キロ）の竹島の実効支配はあり得ず、3年に一度の捜討（当）官の巡察の記録も無い。世宗実録地理録（1454）では、同島には人が多数住み、鬱陵島から見えるとあるが、30浬が限界であるのに50浬（145キロ）も離れた竹島を認められる筈がない。世宗実録には鬱島と于山は一つの記録もある。勅令41号（1900）鬱島郡司に竹島石島を管理させたとするが、両者の距離2～3キロの記録もあり、当時韓国は「竹島」

名は使われていなかったので、それは鬱島付属の竹嶼等で竹島ではない。また島根県吏の巡見を容認しており、韓国側の主張には悉く根拠がない。

従って韓国は同島は日本の植民地支配にで奪われたものだと主張するが、歴史上実効支配の史実はなく、これに対し我が国は永く実効支配し、明治38年の領土編入は無主地先占にて国際法上揺るぎない根拠（権原）を持つ。

◎尖閣諸島領有の根拠

尖閣諸島は、沖縄県石垣市登野城2390～4番地の魚釣島等五つの島と四つの岩礁からなり大正島は国有地だが他は民有地（さいたま市在住栗原氏保有）で面積は計5・48平方キロ。政府が借り上げて（2450万円／年）いたが、今年9月11日に購入し、「平穏かつ安定的維持管理」を名目に一般の上陸を制限している。中国は1971年突然領有を主張し始め、武装大漁船団で来襲（1978）、しばしば漁船が領海侵犯し、海保船に体当たり（2010）したり、活動家が不法上陸したり、頻繁に各種機関の監視船が周辺海域を航行しては領海侵犯を繰り返しているが、特に政府の国有化後それが甚だしい。また1992年制定の「領海及び接続水域法」で不法にもこれを取り込んだ。

この島は明治18年八女の古賀辰四郎が探険し、明治政府が10年間慎重に他国の支配していないことを確認し、明治28年1月14日「無主地先占の法理」で国土に編入した。翌明治29年これを無償借り受けた古賀氏は同島で鰹節製造、羽毛、グアノ・サンゴ採集に従事し（一時は99世帯248人が居住し古賀村を形成）、その子善次は有償払下げを受く（昭和7、昭和15撤退）。この間大正8年に同島海域で中国漁船が遭難漂着救助（31人）すると、中華民国長崎領事は「日本帝国沖縄県八重山郡尖閣列島和洋島（魚釣島のこと）」の4名（石垣村長豊川善作、雇玉代勢孫伴、古賀善次、通訳松葉ロブスト）に感謝状を贈った。

戦後の米軍占領下では琉球政府が管轄し、米国務省マクロスキー報道官は「尖閣は沖縄の一部」と声明し（昭和45・9・10）、米軍は大正島（国有地）と久場島（古賀氏から）を射爆場として借り上げ（1万1104ドル）現在も政府が借り上げて提供を継続している。昭和28年には人民日報（1・8日付け）は「魚釣島は琉球の一部」と報道し、北京市発行の地図には日本名で記され国境も同島の西の中国寄りに引かれていた。

然るに、1968年にECAFE（国連極東経済委員会）が同島海域を調査し、大量の石油埋蔵量の所在を発表（1969）すると、突然台湾（1971・6）、次いで中国（同・12）も地図を書き換え、領有権を主張し始めた。その理由に①琉球王国への柵封使が航海の目印にした記録がある、②日清戦争で略奪された台湾の一部だ、③大陸棚の延長線上にある。あるいは④西大后が、同島で採取した薬草を献上した盛宣懐に下賜した島だ。⑤その他古書（籌海図編・日本一鑑・水師呉楨の倭寇迫撃）に記述がある等を挙げている。然し見ただけでは領土にならないし、然も冊封使船を運航したのは琉球人であった。尖閣が台湾の付属島でなかったことは、明治時代の中国古書又は戦後の台湾省編集の文献も北限を彭佳嶼としていたことで明らかであり、且つ明治政府の領土化は下関条約（明治28・4・17）より前だ。

大陸棚の延長の限界が沖縄トラフとする中国の主張は地理学的に不合理とされ、西大后詔書は真筆でないと言われ、明の籌海図編の沿岸山沙図に載る尖閣は海防のためで正式の版図を示す福建沿岸総図や羅源県志、清寧徳県志や福州府境図にはない。また日本一鑑（1556：鄭舜功）は琉球への航路図で尖閣の領有とは関係なく、水師呉楨（1374）の迫撃した「琉球大洋」は特定出来ない。

中国は日本の資料で、「三国通覧図説」（林子平：1785）では、尖閣は中国と同じ色分けになっている。また中山世譜（1725）「琉球36島」に尖閣は入っていないとするが、前者は冊封使録の中山伝信録によった個人のもので権威はなく、後者は租税対象地を記したもので領有権を損なうものではない。また中国は2022問題として沖縄返還（1972・5・1）後の日本の実効支配50年による時効成立を阻む考えのようだが、我が国は明治28年（1895）以来実効支配しておりとっくの昔に時効も成立している。

従って、日本の国際法上の「無主地先占の合法性」は動かず、中国は過去の主張を翻しており、「禁反言の法理」（Estoppelの法理）に触れ、かつECAFE発表後の理由付けはクリティカルデート（Critical Date：裁判所が決める決定的期日／証拠許容限界期日）上無効で、その主張は国際法上成り立たない。

なお、台湾の本件に対する立場は二分している。即ち中国寄りの馬英九総統（米国大学で尖閣諸島の論文を書く）の国民党は台湾領を主張するが、李登

輝元総統を中心とする進民党系政治勢力「台湾団結連盟」は日本の領土と認めている。

ここで沖ノ鳥島に触れておくが、同島は東京から南へ1700キロの太平洋上の二つの島（東京都小笠原村沖ノ鳥島：国交省管理）で昭和6年この無主地サンゴ礁を東京府に編入した。昭和15年には飛行場整備を始めた程大きかったが、波浪で侵食され現在は二つの岩が護岸工事で保護され、都が周辺に漁礁を作った。日本はこれを島として国連大陸棚限界委員会にEEZで認めるよう要請したが、中国は島ではなく岩で、EEZを持つ条件を満たさなく、これを認めないよう申し入れていた。然し同委員会は日本の主張を認め200カイリ（370キロ）のEEZ（日本の総国土面積を上回る41万平方キロ）の海域を得ることができた（2012・4・28）。

◎北方4島領有の根拠

北海道知床半島を指呼の間に位置する択捉島（面積我が国の島の第1位）、国後島（同第2位）、色丹島及び歯舞群島は合計面積5036平方キロで千葉県や愛知県の広さに等しい。ソ連は終戦後米軍の占領配備の虚を突き（米軍が占領することになっていたが配兵していなかった）、昭和20年8月28日～9月5日の間に不法に軍事占領し、無辜の住民（1万7千人余）を追い出して居座り続け、今日ではロシア人1万5600人が住み、1個師団を配置して軍事力を強化し（戦車等を新式に更新、最新の強襲揚陸艦を配置）、大規模開発（飛行場・港湾等）を行い、アジア太平洋国家参入のための極東開発の一環と位置付けている模様だ。

我が国は1955年以来その返還交渉を続け、56年日ソ共同宣言に漕ぎ着けたが、その後日ソ（ロ）の国際的立場と国際関係の変動に左右され前進後退を続けてきた。

この北方4島は、秀吉時代から蝦夷地を支配した松前氏が1644年には早くも択捉島の地図を作り、1799年になると幕府が数年間直轄して警備役人を置いて支配し、日露通好条約（1855・2・7）で国境を択捉島とウルップ島の間（択捉海峡）に定め平和的に確定され、更に樺太・千島交換条約（1875・5・7）でこれも決めて千島列島が平和的に我が国に帰属した。従って千島列島には4島は含まれず、日本の固有の領土であることは明確である。米国も国務省対日覚書（1956・9・7）でこれを認め、英国もこの支持を声明した。

然るに、ロシアは「第2次大戦の結果を受け入れよ」、「日本は平和条約で侵略地を返還させられた」、「ソ連はヤルタ会談で対日参戦の条件として米国とその取得を合意したものだ」などと主張して不法占領を続けている。

然しその主張は何れも不当である。

第1に、4島はソ連が終戦後に不法占領したものである。また、ソ連は大西洋憲章（1941）の領土不拡張の国際公約に反している。領土の確定は平和条約で初めて決まるものである。

第2に、ソ連はサンフランシスコ平和条約に署名せず、放棄されたとしてもソ連が千島列島及び樺太を領有する権限はない。ましてやこの4島は、千島列島に含まれないし、侵略地でもなく、元来返還の対象ではない。

第3に、ヤルタ協定は秘密協定であり、当事国でない日本の預かり知らないことで拘束されない。然も米国はヤルタ協定は違法で無効であることを宣言した（1950：アイゼンハワー大統領）。

従って、北方4島は日本固有の領土である法的根拠は明明白白、更に全千島列島さえロシアの軍事占領は国際法的に不当であることに、一点の疑いもない。

私の初夢

陸士61期　太田　豊

「編注・筆者は旧関東州大連市の生まれ。旧制官立大連第二中学校から陸軍予科士官学校に入学した陸士61期生である。戦前大連には日本人約30万人が居住し、22校の小学校と14校の中学校と高等女学校があった由で、戦後も同窓会活動が活発に行われ、今もなお、大連同窓会が継続しており、筆者は長くその世話役を務めて現地との交流を続けており、現地の状況に詳しい。」

◇

江沢民総書記の時代の中国は、政権維持の目的から、専ら日本の国内問題である「靖國神社」問題とか、過去の有りもしない「南京大虐殺」を殊更、国民に宣伝し、反日運動を煽った。

胡錦濤総書記の後半になると、一転、南西の島々や、我が国固有の領土である「尖閣諸島」が昔から中国固有の領土であると言い出し、国民に反日運動の火を付けた。

政府の援助を受けた多くの漁船が、民兵を乗せて、「尖閣諸島」周辺の領海線を犯し、折あらば上陸せんばかりの行動をとり、最近は政府の3千トンクラスの艦艇まで出動させて示威行動

を行うまでに発展し、先日は中国全土百箇所以上の都市で反日暴動が発生して多くの日本企業が膨大な被害を被った（幸いなことに、大連ではこのような反日運動は起こらず、大連市民の大多数は、反日暴動の発生自体知らないそうである）。

中国の「尖閣諸島」への不法行為に怒りを感じていたが、今年の初夢に、こんな夢を見た。

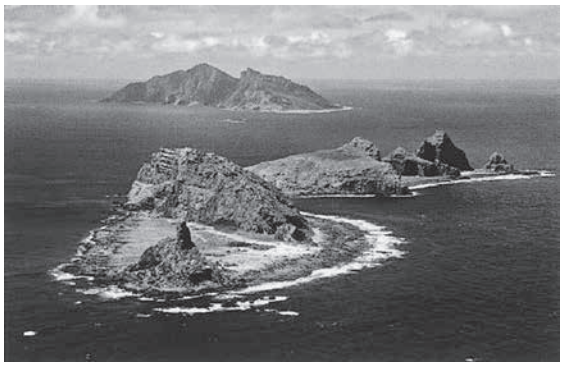
沖縄県普天間基地の米軍海兵隊の発表から始まる。

第一報「昨日、当基地から通常の訓練飛行を行っていたオスプレイ1機が、折からの強大な低気圧に巻き込まれ、左側ローターを損傷して飛行不能となり、尖閣諸島魚釣島の東側平坦地に不時着した模様。なお、不時着時に機体の一部も損傷した。」

第二報「当基地では、ヘリコプターにより乗組員の救助を行うと同時に、機体の修理要員を降下させたが、修理に時間が掛かるので、日本政府に協力を要請したい。①周辺海域の警備に海上保安庁の巡視船、及び海上自衛隊のイージス艦を配備して警戒をしてもらいたい。②機体修理のための修理要員、及びオスプレイ警備のための陸上自衛隊員を派遣してほしい。当地が米軍基地ではなく、日本政府の所管地域であるためである。」

第三報「修理に日数が掛かりそうなので、駐留者の仮設宿泊設備、及び食料を提供してほしい。なお、仮設桟橋、仮設電波灯台、仮設燃料タンクを設置してほしい。」

ここで夢は終わった。日本政府が、この要求を承諾するかどうか。若しも承諾すれば、米軍の要請という名目で、日本が中国と武力を交えずに領土として完全な実効支配ができるのだが、「人の褌で相撲を取る」という言葉もある。蓋し、名（迷）案ではないか。



尖閣諸島・手前は魚釣島

「世界に一つだけの華」―海軍落下傘部隊ゆかりの地を巡る―

評議員　倉形　桃代

風光明媚な南房総・千葉県館山市は、季節毎の花に彩られ、青い海に囲まれた地で、私の好きな小説『南総里見八犬伝』の舞台になった場所でもあります。

当顕彰会の会報『特攻』第92号に私が書いた陸軍の義烈空挺隊に関する記事が掲載されたところ、「何故、海軍落下傘部隊のことは書かないの？」という声がありました。今回は地元にお住いの藤田幸生副理事長のご案内で、海軍落下傘部隊ゆかりの地・館山一帯の戦跡も併せて見学・研修をして参りました。

○海軍落下傘部隊発祥之地

南房総では、近代化の波が押し寄せた明治期より、首都圏防衛のために構築された東京湾要塞の一部として、砲台等の機能が順次整備されました。大東亜戦争末期には、水上・水中特攻の基地や、魚雷発射基地も配備され、本土決戦に備えていました。

東京湾の入口に位置する要所に、昭和5年に開隊したのが館山海軍航空隊で、現在は海上自衛隊最大のヘリコプター基地・第21航空群館山航空基地となっており、艦載型ヘリのマザーベースとしての役割や沿岸防備・急患輸送等、多様な任務を担っています。

部隊の敷地内に、海軍落下傘部隊の碑があるというので、史料館の見学も兼ねて航空基地見学に伺いました。

見学に先立ち、館山地域史研究会会長の川村巌先生より「飛行特技兵」の落下傘教育を行っていた館山海軍砲術学校・館山海軍航空隊での訓練、そして戦争末期、制空権を失った状況下、潜水艦に乗って敵地に奇襲上陸作戦を行う特別陸戦隊へと転換を余儀なくされた経緯等についてご教授を頂きました。任務の特殊性から、確たる資料が少ないそうですが、詳細な研究をされている川村先生に直にお話を伺えて、大変勉強になりました。

その後、広報室の高橋一曹のご案内で、敷地内にある施設を見学しました。基地の外柵沿いにある「海軍落下傘部隊発祥之地記念碑」は、平成5年11月に海軍落下傘部隊の生存者・御遺族・有志の方々の手によって建立されました。碑は金属製の落下傘を円筒形の台座に載せた形に作られています。

第21航空群史料館には、旧海軍時代から現海上自衛隊に至るまでの写真や

関係史料が展示されています。特に目を引いたのは、落下傘部隊用に作られた九九式小銃の銃身を真っ二つに分解可能にした「二式銃（テラ銃）」でした。テラ銃の「テラ」は「鉄砲・落下傘」の略だそうです。

その後、グラウンド・管制塔を回った後、隊員食堂で昼食を頂きました。そのメニューは、金曜日だったので、隊員の皆様と同じカレーでした。海軍の伝統を受け継ぎ、今でも海上自衛隊では、金曜日にはカレーを出すそうです。基地によって味付けも様々で、給養員の方々が独自のレシピで腕を振っておられます。美味しく頂きました。

○赤山地下壕

午後は史跡見学をいたしました。

最初に訪れたのは、基地のすぐ南にある赤山に掘られた「館山航空隊赤山地下壕」で、かつては基地と地下通路で繋がっていたそうです。総延長約1・6キロの地下壕について、資料・証言もほとんど残っていないとのことですが、館山海軍航空隊の司令部・指揮所や病院、発電所、貯蔵庫等に使用されていたと推測されています。

受付でヘルメットを借りて、懐中電灯で足元を照らしながら壕内を歩いてみました。薄暗い壕の壁には、ツルハシの跡がはっきりと残っています。驚いたのは、壁のそこかしこに地層の断面が見えたことです。しかも地震の痕跡なのか、壁の亀裂を境に、綺麗に流れる地層の縞模様に段差が生じているのを視認することができました。とてつもなく大きな自然のパワー・大地の躍動を感じました。壕の奥の壁に、御真影奉安殿が綺麗に刳り貫かれていたのが印象的でした。

○館山海軍砲術学校跡

次の目的地「館山海軍砲術学校跡」地（館山市佐野）は、当時の面影が僅かに残る、静かで広々とした場所でした。当時あった正門から真っ直ぐに伸びた道を挟んで、右側の校庭だった場所には田圃が広がっています。左側の兵舎や施設が並んでいた場所には、館山市立房南中学校や民家が並んでいます。「館山海軍砲術学校記念碑」は、田圃の一角に、まるで真っ直ぐに天に向けて立てた砲身のような姿で聳えていました。碑の周囲には、砲や艦の碇や硫黄島から回収した銃剣等が置かれていました。それらはまるで先人の忘れ形見のようで、長年の風雨に晒された姿を痛ましく思いました。

記念碑から正門方向に引き返しながら、烹炊（ほうすい）所（食事を作る作業場）に隣接したボイラー室だったレンガ造りの遺構の側を通り、今回特に心を惹かれた「洋上降下訓練プール」を探しました。川村先生から「中学校の裏辺りにある」と伺っていたので見当を付けて行くと、フェンスに囲まれたプールを発見することが出来ました。近くに寄ると、コンクリート製の水槽から上る梯子が6箇所あり、底には途中から傾斜が付いて深くなっています。当時、プールサイドに建っていたという20m鉄塔の礎石と思われる部分も綺麗に残っていました。今は水も無く草に覆われていますが、当時このプールでは、落下傘で洋上着水する際、水上5mで素早く落下傘の装帯の止め金を外す感覚を体得する訓練が行われたと言われています。傘は絹で作られていたので、上から被ると息ができず、水中で傘や吊索が体に巻きついて殉職された方もおられたそうです。

これらの地で厳しい訓練を受け、空中にこの身一つで飛び出す勇気と挺身赴難の敢闘精神を培った「空の華」、その多くは遠い南の島で戦い散って逝かれました。正門から続く一本道に立ちながら、二度と戻らなかった方々の在りし日のお姿に思いを馳せると万感胸に迫る気持ちになりました。

○海軍落下傘部隊慰霊碑

最後に訪れ安房神社（館山市大神宮）では、境内にある「海軍落下傘部隊慰霊碑」に参拝しました。鳥居の脇には、ピンクのサルスベリの花が咲き、静かな境内は、清々しい神気に満ちていました。まず、本殿に手を合わせ、この地を訪れたご縁に感謝しました。慰霊碑は、本殿に向かって左側のエリアに静かに建っていました。少し離れて並ぶように「館山海軍砲術学校第三期兵科予備学生戦没者慰霊碑」が建っています。純白の傘を思わせる白い石材で造られた「海軍落下傘部隊慰霊碑」（田中角栄元総理揮毫）は、昭和48年に元海軍落下傘部隊の方々によって建てられました。碑には横須賀鎮守府第一特別陸戦隊43名、第三特別陸戦隊46名の戦没者名が刻まれています。毎年5月27日には、碑前において海軍落下傘部隊慰霊祭が行われていますが、戦友・御遺族の高齢化に伴い、参列者が絶え、今では宮司と関係者のみで行っているそうです。私は手を合わせて、英霊の御遺徳を偲びながら祈りを捧げました。

○研修の終わりに

海軍で落下傘部隊を持ったのは、唯

一日本のみで、大東亜戦争の戦場で華開いた、正に「世界に一つだけの華」でした。その歴史は短く、昭和15年11月に、横須賀海軍航空隊で落下傘の開発・研究に着手し、各実験を重ねて、大東亜戦争の戦雲迫る昭和16年9月20日、遂に我が国初の海軍落下傘部隊(空中挺進部隊)横須賀鎮守府第一特別陸戦隊が誕生しました。翌17年1月11日、堀内豊秋中佐率いる横須賀第一特別陸戦隊は、セレベス島メナド郊外のランゴアン飛行場に、日本初の落下傘降下による挺進作戦を敢行し、同飛行場を占領しました。同年2月20日には、横須賀第三特別陸戦隊(司令・福見幸一中佐)がチモール島のクーパン飛行場の占拠に成功しています。

落下傘部隊の任務は、敵の陣中に降下して奇襲攻撃をかけて戦う部隊です。落下傘の開傘時にかかる衝撃に耐え、怪我なく降下して、直ぐに戦闘行動に移れるよう、柔軟で強靭な体と精神を作るため、日夜厳しい訓練が行われました。その訓練課程に「デンマーク式海軍体操」を導入されたのが、第一特別陸戦隊司令堀内中佐であることは有名です。

華々しい戦果を上げたメナド攻略作戦でしたが、遮蔽物のない飛行場の真上に降下したため、死傷者も多かったそうです。作戦の都合上、日本初の挺進作戦は報道されませんでしたが、約1カ月後の2月14日に行われた陸軍挺進部隊のパレンバン攻略作戦の戦果は大々的に新聞報道され、その記事を読んで感激された作詞家の梅木三郎氏が、かの有名な「空の神兵」の歌詞を書いたのです。「海軍落下傘部隊の歌」もあるのですが、歌詞は分かるがメロディがなかなか見付からないと探している知人がいます。もしご存じの方がいらっしゃいましたら、教えて頂ければ幸いです。

今回の見学・研修を通して、川村先生始め多くの方々からご指導を頂き、落下傘部隊の生存者が綴られた体験記を読みました。多くのことを学べたこと、それをきっかけとして更に学び、慰霊・顕彰をしていきたいという気持ちになりました。サポートしてくださった皆様に感謝いたします。

海軍落下傘部隊はもう存在しませんが、その魂は今も脈々として祖国を守る防人達に受け継がれていることに敬意を表し、いつも心からのエールを送っています。

21空群史料館

21空群司令部庁舎

安房神社本殿

DSCF6255

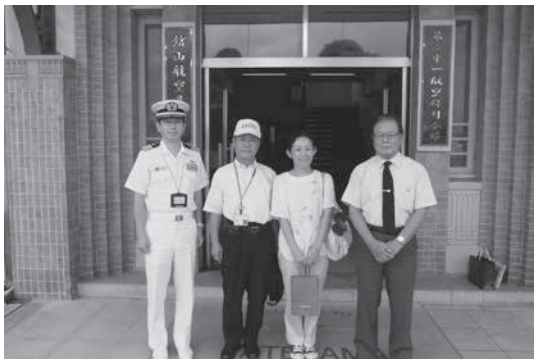
海軍落下傘部隊慰霊碑と副碑

海軍落下傘部隊慰霊碑

館山海軍砲術学校記念碑

海軍落下傘部隊発祥之地記念碑

赤山地下壕の入り口



司令部玄関にて（右：川村巌氏）

洋上降下訓練プール

二式銃「テラ銃」

特攻平和観音造立趣旨

評議員　水町　博勝

特攻平和観音については、平成18年5月、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会がまとめた小冊子「特攻平和観音と世田谷山観音寺」が、特攻平和観音の由来、観音像と世田谷山観音寺とが見えざる糸で繋がっていると思わざるを得ない歴史の細部を、後世に伝承するために作られました（文責・故菅原道熙顧問）。

平和観音会の活動により、及川古志郎元海軍大将（昭和20年5月28日まで海軍軍令部総長、後軍事参議官）は、河辺正三元陸軍大将（終戦時航空総軍司令官）と相談し、陸海軍それぞれ二体の観音像を譲り受けることにしました。「広く関係者から浄財を集めるため」と記されていて、最初の活動記録がこの冊子で確認できました。

会報第92号の「菅原道熙顧問追悼の記」でも触れましたが、小生が転居の際、父の資料の中に「特攻観音に関する綴」がありました。見ると浄財を集める趣意書等その続きが綴られていることが確認できました。

沖縄戦に続く本土決戦準備時点で、陸軍の航空総軍は、特攻２１００機、一般１０００機を保有し、特攻を優先した。第六航空軍は、鈴鹿山系以西の本州、四国、九州の西日本を担当して一般４００機、特攻１０００機を運用し、司令官は菅原道大陸軍中将であった。

菅原元司令官が平和観音造立趣旨を起草し、水町勝城陸軍中佐（第六航空軍参謀、後航空本部部員）は、これに基づき、趣意書の作成、集金、開眼式次第や会計報告書作成等の事務を担当したことが分かりました。

父は、戦時のことを、戦後何も語らなかった人の一人でしたが、語らずとも、この綴りを見れば自ら語りたいものがある、との思いで残したのでしょう。その中には、次の10点程のものが綴られていました。

① 平和観音造立趣意（吉井芳純・静岡清水寺住職権大僧正、関口慈光・日光山華蔵院住職大正大学教授）

② 浅草寺観音像開眼供養大法会の謝文（引揚援護庁復員局・昭和二十六年六月二十五日）

③ 平和観音造立趣旨（陸軍中将菅原道大元第六航空軍司令官・昭和二十六年九月自筆）

④ 神風特攻観音造立趣意書（厚生省第二復員局法務調査班内神風特攻観音会・昭和二十七年二月）

⑤ 平和観音開眼式次第等（東京護国寺・昭和二十七年五月五日）

⑥ 特攻観音会会計報告（昭和二十七年十月）

⑦ 平和観音遷座式（護国寺白蓮社から世田谷観音堂・昭和二十八年七月十二日）

⑧ 特攻平和観音奉賛会賛同者名簿（陸軍・昭和二十九年五月）

⑨ 特攻平和観音法要案内（昭和二十九年五月五日・昭和三十年五月五日）

⑩ 特攻平和観音奉安通知（昭和三十一年三月）

造立趣意書に基づき、開眼式が行われ、その後世田谷観音寺への遷座が行われた経緯に関する記録を紹介したいと思います。

先ず、元司令官の「平和観音造立趣旨」でありますが、これは表裏7頁にわたる直筆であります。難読の箇所には仮名を振らせていただきました。

○平和観音造立趣旨

「思へば激しい戦場で一塊の肉片も留めず無念の思を残して散った肉身、遠い異域に萬斛の恨を呑んで非業の最後を遂げた同胞、又は残酷な戦災を受けて痛ましい骸となった人々、悲惨な生活に祟られて徒らに命を縮めた人達、それら幾多の霊は今果してどうなっているでせうか。

それらの内、未だ眞に慰められぬ無辜の霊が今もなほ我々の周辺に犇めいています。終戦以来食と住とに追いつめられていた我々はそれを忘れがちでした。然しこのまま忘れてよいものでせうか。これでどうして正常な國土、平和な世界が築けませう。何んとかしてもっと温かい親しい気持ちで、しかも何人からでも拝まれる姿として、この寂しい霊を慰め、且懇ろにお祭する途はないでせうか。」

右は吉井芳純師（静岡清水寺住職権大僧正）関口慈光師（日光山華蔵院住職大正大学教授）の發願になる平和観音造立趣意書の冒頭の書出しであります。右の企てが忽ち四方の感激を呼び有志の方々が平和観音会を設立して全国に普及することになり、過ぐる六月二十四日には平和観音の開眼式を東京浅草観音に於いて千僧法会の下に盛大に営まれましたことは当時の新聞が写真入りで特報し、ニュース映画でご紹介されましたので大方の皆様ご承知のことと存じますが、その後内約五十体が日光輪王寺山内に遷座されました。

さて我らの敬愛追慕已まぬ特攻隊員は冒頭にあるように真に一片の肉身をも留めずに散った模範的なものですが、果して無念の思いを残してゆかれたのでせうか。

これこそ死を見ること帰するが如くに、莞爾として操縦桿を握って、嬉々として還らぬ征途に就かれましたことは、その指揮に当たりました私共の眼底深く刻まれ、忘れんとしても忘れえない、状景であり、生きた観音様のお姿こそこんなものだろうかと今更感慨深いものがあります。

されば特攻隊員の英霊はさ迷っている筈はなく、夫々安穏の境地に成仏して居られることを信じて疑いません。然るにここに萬斛の血涙を呼ぶものは此の悲惨な敗戦と云う現実であります。真に必勝を信じて進んで国家興隆の礎石ならんと征かれたこれ等の英霊、果して今如何なる思いで居られるでせうか。必ずや残さなかった幾多の恨みに其魂魄も鎮まり難いものがあるのではないでしょうか。死処を得ずして残存せる吾人は一言のお詫びも申し上げずに居ることが出来るでせうか。特攻に直接関係の深かった私共の日夜苦慮しているのは、如何にしてこれ等英霊のこの恨を慰め冥福を祈るかにあります。

特攻隊員の活躍は正に世界史上空前にしてまた絶後なることを断言して憚からぬ壮絶無比の壮挙で、青史に記す特筆大書さるべきものでありませう。然し壮挙の陰には幾多の無理難題が累積して居りましたのを、微笑の裡に克服した勇士の心境には自然に頭の下がるのを如何ともなしえないのでありました。その境地は我等同胞以外には容易に窺知をゆるさないところでありませう。これ一般戦死と区別され特技として賞賛されし所以であり、我等も亦茲に平和観音会の計画に賛し、観音一體に顕現して特攻隊員の英霊を永代にお祭せんと祈願する次第であります。特攻隊員達の感激は固よりひとり私共指揮に任じたものだけではありません。否直接教育訓練に当られた人、起居を共にし寝食を同じうした戦友、基地に特攻機と取組んだ整備員、出陣直前迄親身も及ばぬ世話に献身された青年団員など、更に更に熱烈な感激が印されて居ることでせう。今回この祈願も関係の有無を問はず、その直接たると間接たるとに論なく廣く大方のご賛同をお願する次第であります。

然しかくてはあまり廣汎にすぎ自然調査の行き届きかねる節もありますので、実際に関係の明らかな一定範囲の各位にお願いするにすぎませぬ。どうぞ前述の趣旨を酌み最寄知己の方になるべく廣くご紹介、ご勧誘下さらば幸甚の至りであります。敢て額の多少を問ひません。零細な大方のご喜捨こそ本当に意義あることと存じます。

希くは此の趣旨を御覧の皆様、一瞬冥目合掌して静かに特攻勇士の在りし日の面影を思浮かべ、転じてその純真無垢な慈顔が大慈大悲の平和観世音と化して永く後世に光被するの因縁を思ひ、本願成就の為に満腔のご協力をお願ひ致します。

尚補遺として別紙をご覧下さい。

昭和二十六年九月

菅原道大
河邊正三

別紙

観音像其の他について

一、今回造立の観音像は大和法隆寺の秘佛「夢ちがい観音像」を写して試作したものであります。即ち発願主が特に法隆寺貫主佐伯定胤大僧正の許可を受け元法隆寺国宝保存修理事務所長神戸工専名誉教授古宇田實氏の指導に依り謹鋳したもので、高さ壱尺八寸の金銅像であります。他の複製を認めず、分譲又は頒布は行われません。

二、観音像の御胎内に法名（俗名までを可）を書入れた巻物を納め、寶前に過去帳を備えます。右巻物は僭越ながら私共が斎戒沐浴して謹書することをお許し願いたい。

三、観音像の後背には造立者の氏名及祈願文を基座の正面には造立者の氏名を刻みます。氏名は喜捨の範囲に従って最後に決定いたします。例えば奉賛将兵一同とか航空関係者有志とか適合した名にしたいと存じます。但し協賛者全氏名は別途永久保存の方法を講じます。又祈願文の簡単なものとして其途の指導に従い撰びますからお委かせ願います。

四、奉安の場所は名勝たる日光山中尊寺であります。日光山のもと観音菩薩の霊験に依て開かれた霊山、中尊寺は坂東十八番札所の霊場であります。

五、観音像の造立供養費は一體一万八千円でありますが其の御写真でもお贈りして其の由来を漏れなく遺族に通じたいとおもいます。それで喜捨は一口百円とし幾口なりとも御志次第お願いします。尚ほ全国各地に支部を設けて地方奉安所を定め、毎年春秋の彼岸とかお盆には盛大な供養を行い、期限を定めて希望の場所へ遷座奉安することも出来ます。

追白

今回の企画は右趣意書の如く、特攻隊員を送り出した我等残存者の悲願として発足したのでありますが、或いは特

攻隊員遺族の方にも平和観音造立に協賛して下さる向きのあるやに聞及んでいますので、此趣意書は一通り参考までに御覧に入れ、若し協賛の喜捨があれば額の多寡を問わず謹んでこれをお受けするつもりであります。

以上が原文であります。推敲を重ねられた修文の跡から特攻隊員を見送られた元司令官しか語れない言葉の重さ、苦悩、威厳、部下への敬愛が伺われ、胸が熱くなり、これが特攻平和観音造立の原点と思いました。

その後、父は司令官の意図の下に、自筆でガリ版刷りの趣意書を作りました。

○神風特攻観音造立趣意書

私達の敬愛追慕已まぬ神風特攻隊員は眞に必勝を信じ進んで国家興隆の礎石たらんと決然還らぬ征途に就かれたのでありますが、此の敗戦の現実に英霊は果して如何なる思いで居られるでしょうか、思うて茲に至れば萬斛の血涙を禁じ得ざる次第であります。死処を得ずして残存せる私共は如何にもして英霊の恨みを慰め冥福を祈りたいと思う気持ちでいっぱいであります。

幸に近時静岡清水寺住職権大僧正吉井芳純師、日光山華蔵院住職大正大学教授関口慈光師両氏の発願になる平和観音会設立せられ之に加盟の各種団体に依りて夫々戦没者英霊供養の為既に一百余体の観音像を奉安せられて居ります。茲に私共は平和観音会の計画に賛し神風特攻隊員を観音一体に顕現して永代に之をお祭りし冥福をお祈りしたいと存じます。希くは一瞬冥目合掌して静かに特攻隊員勇士のありし日の面影を偲び転じて其の純真無垢の慈顔が大慈大悲の平和観世音と化して永く後世に光被するの因縁を思い、本願成就の為に満腔の御協力をお願い致し度う御座います。

以下観音像解説等は省略します。

昭和27年2月に作成配布した記録です。私が小学生の時、家で見た鉄筆・ガリ版・手刷り印刷機はこのためだったのかと思い起こしました。

平和観音開眼式（東京護国寺）

陸軍関係者の記録ですが、海軍関係者にも同様に展開されたのでしょう。

そしてこの年5月5日、東京護国寺において特攻隊各霊供養「平和観音開眼式」が、及川古志郎・河辺正三両氏が式辞を述べられ、盛大に行われました。写真はその様子です。

特攻平和観音が、護国寺から世田谷山観音寺に遷座された経緯は、前述の「特攻観音と世田谷山観音寺」の冊子に詳細に記されています。この中にないのが世田谷山観音寺での平和観音遷座供養です。

昭和二十八年七月十二日

・導師讀経　清水谷大僧正

・願　文　太田睦賢和尚願主

・祭　文　及川総代

・式　辞　来賓

・焼　香

及川総代、河辺総代、遺族（陸）総代、遺族（海）総代、太田願主、都知事、区長、一般

・挨　拶　河辺総代

の次第で行われました。

先代の睦賢和尚は、祈願目的の本堂とは別に戦没者の冥福を祈る特攻観音堂を別途建立すべきと決心され、昭和29年に、現在地に移築が開始されました。睦賢和尚は昭和30年5月24日に遷化されましたが、工事は太田賢照和尚に引き継がれ、昭和31年5月18日に目出度く落慶法要が営まれ、以後18日は月例法要日となり、今日まで続いています。年次法要と共に歴史の重みを感じます。

世代が変わろうとも、必勝のため、国家興隆の礎石たらんと征途に就かれた特攻隊員を顕現した特攻平和観音へのお祭りと冥福を祈りたい思いを新たにしました。

また、司令官（指揮官）の意図を如何に参謀（幕僚）は具現するかを見た思いです。

以上当顕彰会の会員でなかったら気付くことのなかったであろう記録を紹介させていただきました。

菅原道大元中将自筆の平和観音造立趣旨（一部）

ＮＨＫ番組に対する所見

副理事長　藤田　幸生

一　はじめに

ＮＨＫは、平成24年8月28日19時30分から20時の間、「なぜ遺書は集められたのか―特攻　謎の遺族調査―」という番組を放送しました。放送後、各方面で多くの反響がありました。その影響の大きさを実感し、この種の番組が放送されたことを嬉しく思いました。今後のために、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会（以下「当会」という）として、この番組に対する所見をまとめることとしました。

二　公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会

当会の活動は、ＧＨＱ占領下の終戦直後から、旧陸海軍特攻関係者によって任意団体「特攻隊戦没者慰霊顕彰会」という形で始められました。その後、厚生省管轄「財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」を経て、平成23年に「公益財団法人」に認定され、現在に至っております。

三　当会と番組との関わり（経緯）

今回の番組に取り上げられたものは、当会のＧＨＱ占領下における活動の一端に該当します。この番組が放送されるに先立つこと約1年前の平成23年10月11日、ＮＨＫ担当チーフ・ディレクター以下3人の方が、当会事務局を訪ねてきました。目的は、「特攻隊戦没者の慰霊活動」関連番組を作るに当たっての事前調査でした。当会専務理事が対応しました。その時、受け継いできた「特攻平和観音縁起」、「特攻平和観音と世田谷山観音寺」など、小冊子コピーをお貸ししました。それには、戦後の特攻隊戦没者慰霊活動の経緯等が記されております。以後、この番組に関し、ＮＨＫと当会との接触はありませんでした。

ただ、この番組が放送される10日前の8月18日、世田谷山観音寺特攻観音月例参拝に、ＮＨＫ社会部副部長と担当記者が二人で参列してくれました。その時、番組が完成したこと、及び28日19時30分に放送されることのお話を伺いました。

四　放送された番組の内容

1　ＮＨＫによる番組解説

当番組について、ＮＨＫは次のように説明しております。

「太平洋戦争中、旧海軍の特攻作戦で亡くなった隊員の遺族を対象に、戦後、徹底した追跡調査が全国で行われ、１０００通を超える遺書が回収されていたことが判った。今回、初めて発見された膨大な調査票には、遺族の家族構成や戦後の暮らし向きが事細かに書き込まれ遺書や遺品の実物が添付されていた。戦後67年が経ち、遺族の殆どは、調査を受けた経緯を知らず、何のための調査だったのか、そして、なぜかけがえのない遺書が回収されたのか、知りたいと願い続けている。取材を進めると、水面下で調査を行っていたある組織が浮かび上がってきた。その知られざる目的とは何か。戦後秘史、謎の特攻遺族調査の全貌に迫る。」

2　番組内容（要約）

番組は、「取材部分」、「ゲスト発言部分」、「キャスターコメント部分」で構成されていました。

【要約】

・　この度の取材により、戦後、回収され、60年間、海上自衛隊の江田島の倉庫の奥深くにひっそりと眠っていた１０００通余りの遺書、遺品が発見された。

これらは、誰が、何のために調査し集められたのか。

・　全国を回収して回ったのは、「特務機関（官）に所属する謎の人物」であった。その名前は、近江一郎という一民間人である。昭和21年2月から26年秋まで、一人で全国の遺族を回り、遺書、遺品を回収していた。

・　この近江一郎とは何者なのか。1枚の写真がある。

遺族の一人（82歳）が、彼のことを覚えていた。「見知らぬ人物が、駅から5キロの道を、トボトボ歩いてきた。父親と会っていた。その父親の記録や話によると、「海軍特務機関（官）の者であり、来訪は、公言無用にしてほしい」とのことだったらしい。

・　取材を進めていくと、２０００の遺族を訪問した近江一郎の陰で支援していた組織が浮かび上がってきた。それは、第二復員局（「二復」）という海軍軍人の復員を担当している厚生省の部局であった。解散させられた海軍省から、復員業務を移管された部局で、ここが、把握していた遺族の情報を提供し、巡拝の旅費等を支援していたという。

・　「二復」には、旧海軍で特攻作戦に深く関わっていた猪口力平元海軍大佐、更にその背後には、寺岡謹平元海軍中将という大物がいて、動かしていた。

・　昭和26年に発刊された猪口力平、中島正著『神風特別攻撃隊』は、特攻を正当擁護する内容になってお

り、その著の中に回収された遺書が引用されている。遺書は、このようなために集められたのかもしれない。

・　特攻を命じた飛行隊長（95歳）は番組の中で、「上層部の人たちは、特攻が正しかった、と言いたかったのではないか」と発言している。

・　猪口力平さんの長男である詫間晋平さんは、番組の中で、「近江一郎さんと父、力平は、裏木戸越しに人目を忍ぶようにして逢っていた。父の夢枕に現れるという英霊たちの慰霊のために、近江さんに回ってもらっていたようだ」という趣旨の発言をしている。

・　回収された遺書、遺品の整理は、今始まったばかりである。

・　番組の中で、戸高氏（呉大和ミュージアム館長・海軍史家）は、次のようにコメントしている。

「『回収』というのは、言い過ぎではないか。当時の特攻遺族に対する冷たい社会風潮と遺族の置かれた立場から、弔問に訪れてくれた近江老人に対し、その心情は、大切な家族の遺品さえも託したくなるような状況になったのではないか。また、海軍再生の意図を持っていた旧海軍としては、特攻作戦実績はその障害になると思ったのではないか。何かの力が働いていたのかも知れない。いずれにしても、公開されずに埋もれていたものは、公開して正しいことを国民に知らせるべきである。」

五　番組内容の考察

1　この番組と（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会との関係

ＮＨＫは、この番組を、戦後における海軍史の総括番組の一つとして、新たに発見されたとする遺書を中心に作成したものであります。そしてこの内容は、当会が終戦直後の占領時代に、慰霊活動を始めたときのことに関するものであります。この番組に名前が出てくる、近江一郎氏始め、寺岡謹平氏、猪口（後に「詫間」と改名）力平氏なども、当会の海軍側の先輩の中に名前を連ねております。

全般として、近江一郎氏が全国を巡拝された終戦直後と、67年経った現在とでは、世相も、環境も大きく変化しております。この番組では、現在の尺度で、当時の事象を判断している一面が拭えないため、全般にその見方に違和感が残る部分があります。

2　誰が、何のために集めたのか

当会では、これらの先輩たちは、戦後の戦没者に対する国民意識の激変に危機感を覚え、何としても特攻隊戦没者に対する慰霊は実施しなければいけない。また、正しい記録を後世に残さなければならないとの気持ちで努力していたと認識しております。なぜなら、その精神は、今も我が会に受け継がれているからであります。これは、ＮＨＫ担当プロデューサー来訪時に、お話もしましたし、貸与した資料にも記されているところであります。

3　近江一郎氏のこと

ＮＨＫは、「近江一郎」氏を、呼び捨てにしました。そして不審な人物として取り扱いました。あの写真の容姿、行動実態から、ＮＨＫが指摘するような動機で実施できたことではないと思われます。終戦直後の国内の状況は、衣食住、生きていく上にさえも、極めて厳しい状況でした。そのような中で、「放置すれば、事実が霧散消滅する。何とか事実を後世に残さなければ、戦没者に対しても、ご遺族に対しても申し訳ない」との強い気持ちから、無理を押して、一軒一軒全国を訪ね歩き、巡拝されたものと伝えられております。「追悼文」と「写経」を持参し、神棚、仏壇の前で読経、焼香して、ご遺族の生活の状況をお聞きし、施策に反映すべく努力したと聴いております。これは正に、命懸けの奉仕と言わざるを得ません。

江田島参考館には、広いスペースを割いて特攻に関する展示がなされております。戦没者名と、遺書の一部も展示されております。そこに、近江一郎氏に関する後掲の「添付資料」のような説明文が掲げられております。ＮＨＫ番組の取り扱いは、この説明文とも矛盾するものであります。

4　回収されたという遺書は、全て実物か

番組では、遺書や遺品について、全て実物の映像が放映されました。参考館に保管され、公開されている遺書や遺品に関し、担当者に調べてもらったところ、約一割が「二復」の文字の入った公用紙に、几帳面な字で書き写された遺書でした。ご遺族弔問の時、話し合いの中で、ご遺族の意図に沿って処理され、実物を託されないときは、内容を、時間を掛けて書き写させてもらったものでありましょう。このことは、遺族のもとに、遺書が残されていることを意味しております。

5　遺族は、何故、大切な遺書を手渡したのか

ＧＨＱ占領時代は、旧軍人活動に様々な制限が加えられ、更に、日本人社会の風潮も戦時とは逆転し、「特攻隊」関係者は、軍国主義の化身のよう

に排斥、非難される時代でした。ご遺族にとっては、ＧＨＱや国内世論の風当たりに肩身の狭い思いをしていました。更に、掛け替えの無い子弟の散華に対し、持って行き場のない憤懣が溜る等、不安で悲惨な状態であったと思われます。

そのような時、巡礼姿の老人が、追悼文と写経を持って人目を憚るように徒歩で訪ねて来て、御霊前にお供えし、読経、焼香をしてくれる、また、特攻のことを正しく後世に残さなければならないと話をしてくれたのです。生活の状況も聴取しています。遺族は感激されたでしょう。その他いろいろな状況の中で、「大切な遺書だけと、その目的のためにお役に立ち、保管してくれるならお預けしましょう。持っていても、彼は結婚もしていないので、将来、どうなるか分からないから・・・」というようなことになったのかも知れません。

6　遺書は新発見か、倉庫にひっそりと埋もれていたのか

ＮＨＫに貸し出した資料においても触れておりますが、集められた遺書、遺品は整理され、厚生省（当時）等を経由して、最終的に全て海上自衛隊江田島参考館に保管されております。このことは、当時の関係遺族には、伝えられております。そして、現在までも申し継がれている遺族の方もおられます。したがって、決して「今回、初めて発見された」ということではありません。しかも、伝統ある聖地の参考館に、整理保管され、一部は公開されてきており、それらは、訪ねて行けば、誰でも拝観できる状態に維持されてきております。

7　「私は知らなかった。何故、今頃」という遺族のコメント

当時、戦没者は、20歳前後の独身者で、父母兄姉が、遺族当事者でした。今回の番組に出演された方々は、当時幼少で、その場に立ち会われなかった方々ではないかと思われます。当事者たるご遺族との間の話し合いが、幼少であった彼等に、きちんと申し伝えられなかったということも考えられます。時の流れです。これは、管理保管した参考館にも言えることであり、人員削減等で、不十分な態勢であることもありましょうが、反省すべき教訓でありましょう。

8　海軍特務機関と不審人物は存在したのか

終戦直後の困難な状況下、ご遺族の情報も面識もなく、信用される肩書きも無い一民間人が、ご遺族を一軒一軒訪ね歩き、心を通じ合わせるまでの苦労は大変なものであったことでしょう。それを見かねて、「二復」勤務の海軍特攻作戦関係者が、遺族の情報や旅費を提供し、身分を保証するため、県庁担当者を紹介するなどして支援していたのです。それが、寺岡謹平元海軍中将、猪口力平元海軍大佐などであって、この方たちも、何とか特攻戦没者の慰霊に尽くさなければと思っていただけに、正に一体のチームであったのでしょう。このような活動が、当番組の中では、「特務機関」として不審がられているものの実態であると思われます。したがって、これらの人たちは、不審な団体でも、不審な人物でもありません。

六　分析結果のまとめ

1　この度、ＮＨＫの番組で取り上げられた海上自衛隊江田島参考館にある遺書、遺品は、戦後、特攻隊戦没者慰霊と遺族弔問のため巡拝した近江一郎氏が、ご遺族から託されたものであります。ここに保管、管理され、その一部は、展示公開されてきました。その遺書等の存在は、移管時、当時の遺族にも知らされており、周知の事実でした。遺書は、実物もありますが、約一割は、「二復」の公用紙に書き写す等されたものです。

2　全国を回ったのは、「近江一郎」という神戸出身の一民間人であり、特攻戦没者の慰霊と遺族の困窮度を調査し、特攻の事実を、正しく後世に伝えるため、資料を集め、たった一人で巡拝された篤志家であり、不審な人物ではありません。聖地参考館には、本人に関する紹介文が掲示されております。また、それを支援した寺岡謹平氏、猪口力平氏も、戦後の厳しい環境を乗り越えて、慰霊活動を開始し、それに尽くされた方々であります。

3　終戦直後の困難な状況下、民間人が、ご遺族を一軒一軒訪ね歩き、弔問して回る苦労は大変なものでした。それを見かねて、「二復」勤務の特攻関係者が、自分たちに代わって慰霊巡拝してくれるものと感謝し、これを、様々な形で援助したのでした。このような活動が、ＮＨＫのいう「特務機関」として、今、不審がられている実態と思われます。

4　遺書、遺品は、以前から、参考館に納められ、きちんと整理、保管、一部展示されていました。初めての発見でもなく、今から整理を始めるものでもありません。改めて、研究の対象にはなるでしょう。

5　番組の中での戸高氏（呉大和ミュージアム館長・海軍史家）のコメントは、おおむね納得できるものでした。しかし、「何かの力が働いていたのかも知れない」とのコメントは、どう理解すればよいのか分かりません。

6　番組全体から受けた感じは、キャスターが、「誰が、何のために、遺族のところから遺書、遺品を回収して回ったのか」と問いながら、その答えとして終始一貫、「海軍の流れを汲む組織が、一民間人を使って特攻隊戦没者の遺族を慰霊巡拝の形で回らせ、遺書や遺品を回収した。それによって、その作戦の存在を消し、あるいは特攻作戦を正当化しようとした。全国の遺族の気持ちをなだめて、思い出の元となる遺書等を回収して回り、併せて遺族の実態を調査した。それらを、倉庫の奥深く仕舞い込んでいた」という不穏な印象を与えるものでした。

しかし、その実態はむしろ、「篤志家の一民間人が、まじめに特攻隊戦没者の慰霊と、ご遺族の生活が困窮していないかとの心配からの弔問でした。正しい事実を後世に伝え、困窮遺族の援助を図るため、現状を調査し、そのための資料を集めていた」という見方が妥当と考えます。

七　おわりに

以上のような状況から、今回のＮＨＫ番組は、六十数年前の特異な時代のことを、現在のものの考え方で見て構成されたものと受け取れます。この番組が、「事実」として独り歩きをし、定着するのではないかという危惧を感じますところから、それは、放置すべきではないと判断して、この所見を残すこととしました。ただ、戦没者慰霊等に関する番組が、今後とも放送され、国民の関心が高まり、一人一人の日本人が、過去について考える機会を多く持つことを期待するものであります。

以　上

【添付資料】

○特別攻撃隊の遺族宅を慰霊行脚した近江一郎氏　**（参考館掲示）**

近江一郎氏は明治24年（１８９１）兵庫県神戸市に生まれ、海軍兵学校を志したが、入学を果たせず、満洲に渡った。終戦後、海軍への志を果たせなかった気持ちを形に表したいと思った近江氏は、懇意であった寺本武次少将（海兵33期）に相談し、特攻隊員の遺品の散逸を防ぐために、すべてを犠牲にしても神風特攻隊員の霊を慰めて、遺書を集めようと決心した。

昭和21年（１９４６）８月、近江氏（当時55歳）は、巡回弔問の行脚を始めるにあたり、及川古志郎大将（海兵31期）寺岡謹平中将（海兵40期）の添え書きを持参して県庁世話課の責任者を訪ね、特別攻撃隊員遺族宅訪問の証明書を発行してもらってから、自身の住む兵庫県から遺族宅の訪問を開始した。

遺族宅では霊前で読経、焼香して、死者の生前の思い出話など聞き、写真を預かった。また、遺書は預かるか、筆写させてもらっている。

兵庫県下を巡拝後、中国、四国、九州から北海道、東北、神奈川、長野、新潟とまわり、残すところは、奈良、滋賀、愛知、静岡、山梨、東京となったが、昭和26年８月、近江氏は奈良県を巡拝中に体の不調を覚え、行脚を中断して神戸に帰り、昭和27年１月21日、59歳で亡くなった。

近江氏は、約６年の歳月をかけて、北は北海道礼文島から、南は鹿児島種子島まで、約１９００軒の遺族宅を巡拝し、１８００通余りの遺書を収集した。

近江氏が収集した資料は、その後、厚生省復員局に引き継がれた後、最終的に教育参考館に移管された。

以　上

大阪護国神社「特攻勇士慰霊祭」に参列して

専務理事　衣笠　陽雄

平成24年10月28日（日）、大阪護国神社において、特攻勇士顕彰会（田川康吾会長・仙幼49期・近畿偕行会会長）主催による「特攻勇士之像」建立後第３回目の「特攻勇士慰霊祭」が斎行された。

本慰霊祭に、当顕彰会の代表として衣笠が参列しましたので、その概要と所見を報告いたします。

一　慰霊祭の概要

「特攻勇士之像」は、平成24年11月現在、全国各地の護国神社等に11体が建立・奉納されている。大阪護国神社での「特攻勇士之像」奉納除幕式の詳細は、当顕彰会会報『特攻』第82号（平成22年２月号）に掲載されているので参照されたい。

各地の「特攻勇士之像」慰霊祭は、毎年行われているようであるが、他の慰霊祭との合同慰霊祭が多く、単独で

毎年「特攻勇士慰霊祭」を行っているのは、大阪護国神社ぐらいではないかと思われる。大阪は、大阪芸大の学生等による「日本人の心を伝える会」がこの建立事業の発起となり、当顕彰会が、それを引き受けた経緯もあって、言わば「特攻勇士之像」発祥の地でもある。また、私は以前から大阪地区での慰霊顕彰活動に関心を持っていたので、今回は希望して参列させていただいた。

慰霊祭祭壇（特攻像は祭壇の後ろ）・右は柳澤宮司

「特攻勇士之像」は、護国神社本殿の右側にあり、本殿にお参りに来た参拝者に直ぐ分かる位置にあった。当日は朝から雨模様であったが、神社境内の木々は、雨に打たれて鮮やかな緑に染まり、しっとりとした雰囲気を醸し出していた。

慰霊祭開始時には、50名以上の方々が参集され、神事が開始された。祭りの最中には雨が本降りとなったが、特攻勇士顕彰会による事前の周到な準備のお陰で濡れることもなく、神事は滞りなく厳粛に斎行された。

慰霊祭は、開式の辞、国歌斉唱、黙祷、修祓の儀、降神の儀、献饌、祝詞奏上、祭文奏上（後掲）、玉串奉奠、撤饌、昇神の儀、神官退下の順に厳粛かつ整斉と執り行われた。特に宮司の祝詞奏上において、終戦直前、満洲の磨刀石において、日ソ中立条約を破って侵攻してきたソ連軍戦車部隊に対し、急造爆雷を抱えて肉薄攻撃し、石頭予備士官学校幹部候補生約９００名の大半が散華されたが、今回その内、大阪出身の18柱が新たに合祀されたことは、宮司の英断であり、注目に値するものであった（後述）。

特攻勇士之像

特攻勇士顕彰会の田川康吾会長が奏上した祭主祭文は次のとおりである。

祭主祭文

大阪護国神社のこの聖地に、平成二十一年十月二十四日、特攻勇士之像を建立し、除幕式を挙行してから今年は三年目の慰霊祭であります。大阪ご出身の陸海軍の特攻勇士五百十五柱に、本年は終戦直前、中立条約を破り満洲に侵入した、ソ連軍の強力な戦車部隊に対して、磨刀石陣において手製の爆薬を抱えて敢然として突っ込み戦死された関東軍石頭予備士官学校生徒のうち大阪ご出身の十三柱を加え、御祭神五百二十八柱の御霊をお迎えして、特攻勇士顕彰会を代表して慰霊の言葉を捧げます。

戦いが終わり、既に六十七年の歳月が流れました。この間皆さんが全てを擲って支えんとした、我が国の生存と繁栄は、戦友・朋友・同輩の方々の努力により、奇跡とも言われる見事な復興・発展を成し遂げました。しかしながらこれらの同胞も老齢化して発展の速度を鈍らせ、失われた二十年現象を呈し、国防意識にあっては、民主党政権の東京裁判史観の信奉と、事なかれ主義により、中共の尖閣諸島奪取攻撃に有効な対策もなく一触即発の状態であります。このままでは、日本は尖閣はおろか、沖縄、ひいては国土全土が侵略の危機にあるのであります。

しかしながら、諸霊におかれましてはご安心下さい。我が日本国民は昨年の東日本大震災以後、ようやく、永い眠りから覚めかけようとしております。多くの命を奪われた大災害に遭っても規律を守り、他を生かす精神に徹し、世界の驚嘆の的になったのであります。また嬉しかったのは、目を見張る自衛隊の活躍でした。日陰者の存在とされた中にあってよくぞ先輩諸兄の意志を継いでくれていたことに感謝と賞賛の言葉を惜しみません。この事は自衛隊アレルギーを解消するきっかけとなり、又憲法改正機運の増大に大きく寄与することになりました。

政治にあっては、ようやく総選挙が近付き保守の政権奪還が待ち望まれる事態になりました。今度こそ国民は間違わない投票を実施しなければなりません。そのためには、我々がこぞって正しい道を示し進まなければなりませ

ん。尖閣を主とする国土防衛は緊急を要します。防衛が出来るのは自衛隊しかありません。自衛隊が軍隊としての能力をつけ、十分な活動が出来るように法を改正し、予算処置を講ずることが緊急の課題であります。諸霊におかれましては、我が国の現状にさぞかし気をもまれていることと思いますが、本日参集しました近畿管内陸海空の自衛隊幹部をはじめ、民間各団体こぞって、二度と敗戦の悲運を繰り返さない、不敗の国家体制作りに向けて力を尽くすことをお誓い申し上げます。

願わくは、諸霊よ、私たちにお力を賜り、日本の国をお護りください。

終わりに臨み、本日御参集頂きました皆様と共に、ご英霊にただただ心からの哀悼の念と深い感謝の誠を捧げ、安らかなお眠りを願って追悼の詞と致します。

平成二十四年十月二十八日

特攻勇士顕彰会

会長　田川　康吾

◇

神事の後、福山駐屯地音楽隊による演奏が披露され、神前での祭りは無事終了した。その後、儀式殿に移動して直会が実施された。神事中の本降り雨も直会開始時にはぴたりと止み、陽も差してきた。田川会長が、神事中に降った雨は、特攻隊英霊の現世を嘆く涙雨であったと言われ、一同納得した様子であった。直会では様々な慰霊顕彰団体からの参列者から色々な話を聞くことができた。私に挨拶の要請があったので、概要、以下の話をさせていただいた。

「本特攻像の建立に当たっては当護国神社の柳澤宮司、近畿偕行会、民間諸団体の方々の大変な御努力・御苦労があったものと拝察いたします。今後については、全国の慰霊碑・像の管理同様、今まで以上の『力』、即ち①像の維持管理の問題、②特攻慰霊祭を地域に根付かせ継続性をもって慰霊顕彰を行う問題、③更に特攻隊員の心・日本民族の心を若い人達に継承させるための「力」であります。全国の英霊の慰霊顕彰組織・活動は遠からず全てこの問題に直面する筈です。当特攻像の建立に尽力された野上前近畿偕行会会長が我が顕彰会への書簡の中で『・・建立が終わった今、私共は建立は慰霊の終わりでなく始まりである事を肝に銘じ今後は建立体制から永久運営体制に切り替えて、国の未来が憂えられるほど地に落ちた道義の回復のため日本人の心の伝承に力を注ぐ事にしております・・』と述べておられるのは至言であり、当顕彰会としても特攻像の数が増えることは歓迎しつつも、何年か後『これは何の像だ?』ということにならないよう着意して建立事業を行って参りたいと思います。どの慰霊団体も戦争経験者が減少し、世代交代が急速に進んでおりますが、戦争経験のない世代が、価値観の全く異なる世代に対し、身を投げ出して国を守ろうとした英霊の心・特攻隊員の心を旧軍出身者の方々のように語ることは大変難しいことでありますが、皆様からしっかり申し受け、継承のための糧といたしたいと思っております。」

直会には、主催の特攻勇士顕彰会・田川康吾会長、大阪護国神社・柳澤忠麿宮司、関西水交会・大沼徹副会長、大阪芸術大学・池田実教授、真田山陸軍墓地維持会・吉岡武理事、大和心のつどい・吉村伊平氏、京都霊山護国神社清掃奉仕の会・山中浩市代表、大阪国際大学・久野潤講師、石頭予備士官学校第13期生・荒木正則氏、現職自衛官の山岡大阪地方連絡部長、篠原第七普通科連隊長、中西航空自衛隊幹部候補生学校教育部長等多方面からの、多士済々の参加者から貴重なお話を頂き、大変有意義な直会であった。大阪という地の慰霊顕彰について、その現状をある程度把握できたこと、また、私が挨拶で述べた事項が杞憂であったことは、今回の慰霊祭参加での大きな収穫であった。

二　参加所見

○特攻勇士之像について

大阪護国神社の入口左側には旧軍関係の慰霊碑・像、顕彰碑が所狭しと並んでいた。特攻勇士之像は何と本殿右側の特等席に悠々と鎮座されていた。緑青が発生していたが、慰霊祭の前に、田川会長自ら像の清掃をされたとかで、綺麗になっていたが、そのお陰か、今まで見た中で最も凛々しい特攻隊員らしいお顔であった。像の建立に当たっては、建立時から宮司であられる柳澤宮司の最大限のご支援・ご協力があって、この場所に建立できたものと聞いたが、ここを訪れる人々は否応なく特攻勇士之像と向き合うことになり、これ程の広報効果は他にないように思われた。直会の時にも、柳澤宮司から、これからは七五三の時期で、お参りに来た多くの人達が特攻像を参拝していくことになる、との説明があったのも頷ける。後から建立された特攻勇士之像が、然るべき場所に立てられたのは、単に慰霊碑群の場所に余地が無かったという理由だけではないと思われる。柳澤宮司の特攻隊に対する思いが分かる気がした。慰霊碑に優劣、優先順位などあろうはずはないが、や

はり、護国神社の宮司の考えは重いなと、改めて認識した次第である。

○肉弾攻撃戦死者の合祀について

今回特に宮司の祝詞奏上において、新たに13柱の氏名が奏上・合祀され、直会において、生存同期生の荒木正則氏から67年を経過してやっと祭ることができたと、感謝・感激の言葉が述べられた。しかし、この英霊の名は、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会発刊の『特別攻撃隊全史』には記載されていない。戦闘の細部は省略するが、終戦直前の昭和20年8月7日、ソ連は日本に対し、一方的に中立条約を破って宣戦布告、8月12日～14日、満洲の磨刀石において、侵入してきたソ連軍機甲部隊に対し、石頭予備士官学校第13期幹部候補生920名余が、急造爆雷を抱いて肉弾攻撃をし、対戦車戦闘でその大半が散華されたという。当時、戦車に対抗し得る兵器が無く、爆薬で特攻攻撃をせざるを得なかった。しかも後退せずに敢然と攻撃したのは、軍の後退配備と国境付近の民間人同胞の安全な後退を援護しなければならなかったという背景もある。

『特別攻撃隊全史』では、特攻隊戦没者とは「命令により、特別攻撃隊の一員として出撃し、戦死後二階級特進した隊員」を対象として記載されている。後に戦艦大和等の乗組員が「準特攻」ということで名簿に追加されている。では、止むに止まれぬ状態から、又は自ら計画的に、個人として自発的に、あるいは磨刀石のような状況での、命令による攻撃は「特攻攻撃」ではないのか。遺族や生存同期生等にしてみれば、自らの命を捧げたことに相違はなく、特攻として認められず、特攻による戦没者として祭られてもいないのは、納得がいかないというのは理解できる。

『特別攻撃隊全史』記載の特攻隊員名簿は、前述の枠内を基準に当時の資料を精査し、特攻隊戦没者と認定し記載している。

航空・水上・水中等兵器を使用した特攻は、比較的把握し易いが、陸軍の肉弾攻撃は、命令があっても特攻現場の状況を把握できない場合も多く、また、万歳突撃で玉砕した戦没者も含めると、範囲が極端に広がる。では何故戦艦大和等の場合は準特攻と認定し、陸軍の島嶼作戦での玉砕突撃などは何故取り上げられなかったのだろうか。陸軍戦没者の遺族の気持ちには複雑な思いもあろう。戦艦大和等の場合は、正式命令の下、艦隊を引き連れて死地に向かった。硫黄島等離島では、部隊ごとに命令により特攻攻撃をした。戦闘の形態は違っても、死地に向かったことは同じである。違いは「特別攻撃隊」か否かであるが、双方とも同じ特攻と見なしても問題はないと思う。ただ、『特別攻撃隊全史』では、作製の前提として、「特別攻撃隊」の隊員を対象（補訂版では範囲を広げて「準特攻」と位置付けた部隊を付加）とし、その他の陸軍の玉砕攻撃等による戦死者は該当者としなかっただけである。特攻隊の定義や名簿の見直し等は時間・資料・人員等の問題から困難であり、今後も前述の前提条件での名簿追加作業に限定されるだろう。

現在重要なことは、特別攻撃隊と同等の活躍をされた離島や満洲等で多くの特攻玉砕戦死者がおられたことを忘れてはならないことであり、その英霊の慰霊をしっかりやらねばならないということではないだろうか。名簿には記載はなくとも、「特攻隊戦没者」同様、自ら命を捧げて散華された英霊の御霊が浮かばれ、遺族の気持ちが晴れるかどうかであると思う。護国神社の宮司が、今回のように、遺族の希望、生存者の証言等から個々の事例を判断され、「特攻戦死者」を特攻勇士として合祀するという処置が、現在の最善の処置と考えるものです。護国神社宮司の皆様の善処をお願いする次第です。

（追記）

前記記事について、大阪特攻勇士顕彰会に意見を伺ったところ、次のようなコメントを頂きましたので紹介いたします。

「・・・磨刀石において、ソ連軍戦車に対する肉薄攻撃を実施した石頭予備士官学校生徒について、特攻勇士顕彰会理事会において、生存同期生荒木正則氏から状況を詳しく聴き、その後、理事会において討議し、この場合は、①『特攻』という命令がなくとも実質上『全く特攻である』、②氏名が明確である、との理由により『特攻勇士』として合祀したものです。したがって、この場合は、特攻勇士顕彰会理事会（柳澤宮司は名誉顧問で、同理事会には当然出席しておられる）において合祀を決定し、柳澤宮司が実行されたことを付記しておきます。また、この場合に限らず、以上の条件のような場合には、広く合祀をしようということになりました。」

平成24年度旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式に参列して

評議員　倉形　桃代

10月13日、爽やかな秋空の下、串良平和公園慰霊塔広場（鹿児島県鹿屋市串良町）において、平成24年度旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式が盛大かつ厳粛に挙行されました。今年で44回目となるそうです。私は会の代表として参列させていただきました。今回は、当日の朝の飛行機で鹿児島へ飛びましたが、心配した式場への移動は予定通り順調に運びました。

受付を済ませて式場に案内していただくと、慰霊碑に向かってシャッターを切っていた当会会員の藤原英夫氏・江名武彦氏にお会いしました。代表で参列する際はいつも緊張するので、嬉しい偶然に緊張が少しほどけた気持ちになりました。藤原氏は、小学校の大先輩が串良基地から特別攻撃隊員として出撃されたご縁でお参りに来られたとのことでした。

追悼式の始まりに、海上自衛隊鹿屋航空基地所属の隊員さんの手によって慰霊塔に国旗・旭日旗・鹿屋市の市旗が掲揚されました。大きな花輪や生花に彩られた真っ白な慰霊塔は、下から見上げると、まるで天に向かってグンと手を伸ばして、大空を抱きしめようとしているように見えました。碑へ登る長い階段の両脇の植込みは「平和」という文字の形に刈られています。

国歌斉唱後に、追悼飛行として鹿屋航空基地所属の対潜哨戒機と救難ヘリコプターのフライ・パスが行われました。実は私は平成18年に行われた追悼式にも参列したことがありました。この地より出撃された予科練甲飛12期出身の服部壽宗二飛曹（三重県出身）の妹・山本節子さんご夫妻の付添いとして参列したのです。追悼飛行の際、式場上空に飛来した航空機に向かって、一心に手を振っておられた節子さん、そしてご遺族・戦友の方々のお姿を思い出し、胸が一杯になりました。私もテントの外に出て、今回参列できなかった節子さんの分もと、航空機に向かって大きく手を振って見送りました。

席に戻ってからは、黙祷・追悼の言葉・献花が行われ、儀仗隊による弔銃の後、予科練乙飛18期出身の平島榮一飛曹（宮崎県出身）の遺書が朗読されました。弟さんのご家族が参列されていました。戦友の方々による「同期の桜」の合唱、式電披露の後、ご遺族代表で予備学生13期・海田茂雄少尉（愛媛県出身）の弟・海田武氏が謝辞を述べられ、同時に新資料の発見で、串良から出撃された特攻機が戦果を挙げていたことが判明して、新たに三柱のお名前が慰霊塔に刻まれた、詳細は後日資料を纏めて配布しますとのご報告がありました。

参列者の高齢化が進み、お参りしたくても現地まで行けないという方も増えたそうですが、ここ数年、お孫さんと思われる若い世代の方が、付添いでお参りに来られているお姿を拝見するようになりました。血の繋がっている親族が代々慰霊顕彰を受け継いでいかれることは、英霊にとって、何よりのご供養になると思います。

体験者の方々から、直にお話を伺える時間は、もう余り残されていません。大先輩方の体験、戦友の方々との思い出を、機会ある毎に伺って記録する努力を、今後も勉強しながら続けていきたいと思います。

◇

翌日、鹿屋航空基地で勤務している友人の案内で、鹿屋周辺の英霊縁の地を訪れました。とても印象に残った光景があります。それは空港へ帰るバスの出発まで時間があったので、見晴らしの良い霧島ヶ丘公園に寄ることになりました。丘を登っていく途中、友人が「お気に入りの場所」で車を停めてくれました。そこからは、鹿屋航空基地が一望のもとに見渡せます。話をしながら景色に見とれていると、一機の対潜哨戒機がブーンというエンジン音を轟かせて滑走路に着陸して来るのが見えました。この日は相模湾で、海上自衛隊の観艦式があり、その展示飛行から帰ってきた機のようでした。私はその対潜哨戒機に、当時この基地にいた海軍神雷部隊の母機・一式陸上攻撃機の姿を重ね、当時もこんな風に離着陸していたのかなぁと思い、遥か時を超えて、英霊に会えたような感動を覚えました。頂上のバラ園は、入場無料の日だったので、入園して展望台に登ってみました。錦江湾の向こうには、忘れもしない、懐かしい開聞岳が薄っすらと見えました。この山を祖国の見納めに、万感の想いで出撃された多くの特攻隊員の方々・・・。その姿を見送り続けた開聞岳は、相変わらず哀しいほど美しい姿で佇んでいました。

串良から出撃・散華された五七三柱の御霊が安らかに眠れますように。私達は、あなた方の事を忘れません。私達の「今」は、あなた方からの贈り物です。大切に護り、未来へ渡す義務があります。日々、考えそのための努力をしながら生きて行きたいと思います。

慰　霊　塔

追悼式式場入口受付

慰霊塔前式場（階段の左右の植込みは「平和」）

旧飛行場主滑走路跡地

霧島ヶ丘より鹿屋航空基地を望む

慰霊塔前式場（当顕彰会献花）

展望台から開聞岳を望む

福岡県護国神社「特攻勇士之像」奉納除幕式に参列して

会員　平野　勝也

平成24年12月8日（土）11時より、福岡市中央区六本松の福岡県護国神社において、「特攻勇士之像」の奉納除幕式が執り行われた。当顕彰会からは、杉山蕃理事長と廣嶋文武理事が参列されるということで私も同行させていただきました。

ここで少し福岡県護国神社についてご紹介いたしたいと思います。

福岡県護国神社は明治元年11月、福岡藩主・黒田長知が戊辰戦争に殉じた藩士を祀るために招魂社として創建したことに始まり、大東亜戦争に至るまでの県出身戦没者約13万柱の英霊を祀っています。また、高さ13メートルを誇る日本屈指の大鳥居が有名で、毎年8月13日から16日までのお盆中には「みたま祭り」も催され、約六千灯余のぼんぼりが夜の境内を華やかにするとのことで、いずれその時期にもお参りしてみたいものです。

福岡県特攻勇士之像（平成24年12月８日建立）

さて、本題に戻らせていただきたいと思います。

当日は大東亜戦争開戦71年目のその日であり、戦争末期に命を賭して国を護った特攻隊の英霊を讃える「特攻勇士之像」の除幕と重なり何とも言えず不思議な気持ちでありました。肌寒い気候でしたが、およそ百名を超える参列者が見守る除幕式となりました。

当会の杉山理事長ら複数名の代表者によって除幕を行い、勇士之像はその姿を現しました。続いて、福岡県内から出撃された特攻隊員の方々の御名前を刻んだ石版を勇士之像背面に納めて屋外での行事は終了となりました。その後社殿に移動し、神事が斎行されました。今まで全国に12体の「特攻勇士之像」が奉納されてきましたが、除幕式に参列させていただくのは今回が初めてでした。この貴重な瞬間に居合わせることができて、感無量でした。

福岡県護国神社は、歴史のある神社ということや、比較的街中に位置していることなどもあってより多くの方々にこの特攻勇士之像の存在が知れ渡り、特攻の真実が若いこれからの世代にも正しく伝わっていくきっかけとなることを願ってやみません。

社殿で執り行われた神事は、各団体ごとの玉串拝礼があり、各団体代表の挨拶を賜りました。また、神事の前半、特攻勇士之像建立福岡県委員会の菅原道之委員長より「経過報告」がなされました。素晴らしい内容でしたので一部ご紹介いたしたいと思います。

「経過報告

自存自衛の為、大敵を向こうに廻して敢然と戦った大東亜戦争は、緒戦の破竹の攻勢も、ミッドウェーの予期せぬ大惨敗により形勢は逆転して、次第に戦勢不利に陥りフィリピンでも苦戦を強いられ、遂に沖縄に敵の上陸を許す事になり、ここに於いて空に海に、見敵必殺の特攻作戦が行われるに至りました。そして我が身を捨てて敵を葬る為に、若い戦士が次々に突入して散華されたのであります。戦後六十七年、お蔭をもって日本は平和に過ごすことが出来たが、反面、我が命よりも護らねばならない国があるという概念が薄れつつあるかの様に思われる。然し、私共はこの精神を忘れてはならないと思います。」

私が常日頃考えていることに非常に近い内容でしたので、頷きながら拝聴いたしました。

先人達が命懸けで護ったこの国に戦後生まれ、六十七年もの間戦争の無い平和な世で育ってまいりました。

しかしながら、真の平和と呼んでよいものか、現代の日本には欠けてしまっている精神があると思います。

単なる「平和ボケ」という言葉などでは済まされないほどに、取り戻していかなければならない精神です。

折しも、昨日は衆議院議員選挙でした。結果はご存じのとおり、反日「民主党政権」を国民は解体しました。

安倍総裁率いる自民党は、単独過半数を獲得し政権奪還を果たしました。憲法改正も視野に入ったということです。日本の国は日本が護る。当たり前のことから目を逸らしてはいけない時が来ていると思います。

この民主党政権における売国政治には多くの国民が憤慨し、逆に目覚めた

特攻勇士之像除幕式

特攻勇士之像除幕式場

挨拶・杉山蕃当顕彰会理事長

除幕式場・前列右端菅原道之委員長

日本人も多いと思っています。

英霊が遺してくださったこの祖国日本を、私たちの世代で終わらせるわけにはいきません。これからも、子々孫々へ末永く繋いでいかなければなりません。そのとき、目を向けるべきはやはりかつての日本人がどんなふうに生きていたのか、どのようにして国を護ろうとしたのか、どんな思いであったのかを知ることだと思っています。そうすると必ず、自らの命を懸けて国を護った「特攻精神」に辿り着きます。我々の世代は、この精神を忘れないためにもしっかり学び、真実を語りついでいく必要があると思います。

「特攻勇士之像」が全国各地に建立奉納されていけば、若者たちも視覚から入ることが出来てきっかけとしては意義深いものになっていくと思います。ぜひ、この特攻勇士之像が全国津々浦々の護国神社に奉納されていくところを見守り、応援し続けたいと思います。今回はこのような除幕式参列の機会を賜りまして、ありがとうございました。

「福岡県特攻勇士顕彰碑（副碑）

私たちは決して忘れはすまい。

日本が昭和十六年から二十年にかけて、日本の独立と存続とを守り、且つ欧米列強から植民地化されたアジア諸国を開放するために大東亜戦争で米・英・支・蘭と戦い、緒戦の赫々たる戦果にも拘らず、戦い利非ずして戦況次第に不利となる。遂に沖縄県にまで敵の上陸を許す事態となり、この敵の圧倒的戦力を阻止すべく、遂に一機一艇をもって敵艦に体当たりする苦渋かつ壮絶な攻撃戦法を取らざるを得なかったことを。

持てる力をすべて尽くして散華された二十歳前後の英霊の崇高な勇姿を末永く後世に伝えるべく、特攻隊戦没者慰霊顕彰会の協力を得て、ここに設けた。

戦後の教育と謀略とにより平和・個人主義に偏りがちな現代の人よ、福岡県出身の三〇一名の英霊の名を台座に収めしこの像を見て触れて、自分の命に代えても護るものが存在するということを考えて欲しい。

平成二十四年十二月八日

（大東亜戦争開戦記念日）

特攻勇士之像建立福岡委員会」

『戦場に赴くにあたり』
―発見された挺進隊員の遺書―

全日本空挺同志会会員
笹原　孝文

平成24年6月5日、陸上自衛隊・習志野駐屯地内の空挺館（資料館）へ旧挺進部隊の遺書の保管依頼があった。依頼主である松井ミヨ子氏（戦死者の妹、旧姓・山口／北九州市門司在住）は、ご両親が亡くなり家財の整理中に、実兄である挺進滑空歩兵第2聯隊所属・山口正義陸軍伍長の遺書を発見した。遺書の存在を知ったのはその時が初めてだった。自宅で保管を続ければ、後世に散逸の恐れがあるため、然るべき場所に永久保管を依頼したいと考えていたところ、知人から陸上自衛隊の空挺部隊の存在を聞き、全日本空挺同志会主催の陸軍挺進部隊慰霊祭（於・宮崎県川南護国神社）が行われていることを知った。

平成23年改修・復元された空挺館（習志野駐屯地内）

平成23年11月23日、慰霊祭参列の際、全日本空挺同志会本部代表・二塚寿氏と対面、相談した。本部顧問・田中賢一氏に確認、戦死時の詳細な状況を知るため、靖國神社に調査を依頼したが、記録については残されていなかった。当初、二塚氏は、遺書の保管先は靖國神社が妥当と考えていたが、一時的な展示後、倉庫に保管される可能性が高く、依頼者の意図に反すると判断し、平成24年10月1日、松石ミヨ子氏から空挺館へ遺書の寄贈が実現した。

空挺館入口

２階への階段

バルコニー

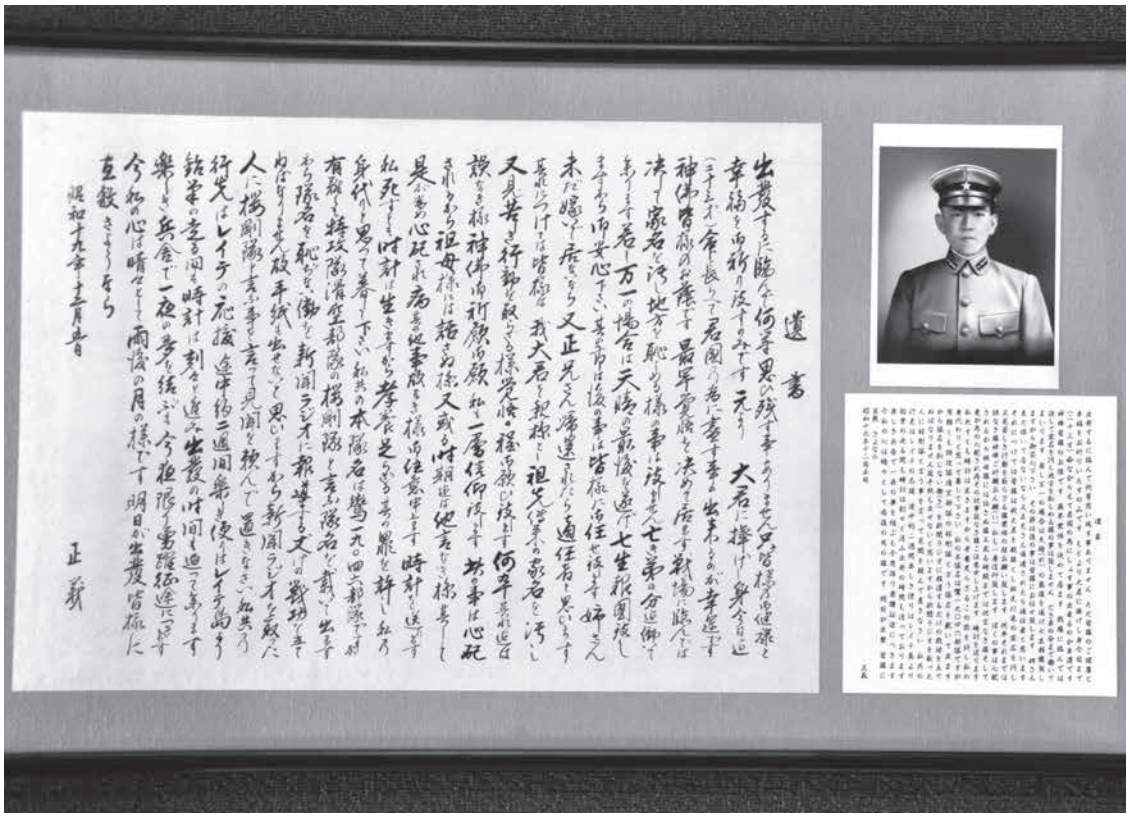
遺書に書かれていた滑空歩兵第2聯隊は、フィリピンのレイテ島近くのルソン島建武集団の中核として、クラーク西方高地を占領し終戦まで戦闘したが、故人の戦死の詳細は不明である。文体もさることながら内容も凛とした精悍さで溢れており、当時の決戦前夜が目の前に浮かび上がってくるようである。今後、空挺館の貴重な歴史資料として展示される。

◇　◇　◇

遺　書

出發するに臨んで何等思ひ残す事ありません只皆様乃御健康と幸福を御祈り致すのみです。元より　大君に捧げし身今日迄（二十三才）命長らへて君國乃為に盡す事の出来るのが幸運です。神佛皆様のお蔭です。最早覚悟を決めて居ます。戦場に臨んでは決して家名を汚し地方を恥しめる様の事は致しません。亡き弟の分迄働いて参ります。若し万一の場合は天晴の最後を遂げ七生報國致しますから御安心下さい。其の節は後の事は皆様に御任せ致します。

姉さん未だ嫁いで居ないなら、又正兄さん帰還されたら適任者と思ひます。



山口正義陸軍伍長の遺書

其れにつけては皆様は　我大君を親様とし祖先傳来の家名を汚し又見苦しき行動を取らざる様覚悟の程御願ひ致します。何卒其れ迄は誤なき様神佛御祈願御願　私も一層信仰致します。

此の事は心配されるから祖母様には話さぬ様又或る時期迄は他言なき様其して是が為め心配され病其の他事故なき様御注意申上ます。時計を送ります。私死すとも時計は生きますから孝養足らざる其の罪を許し私乃身代りと思って暮して下さい。私共の本隊名は鸞一九〇四六部隊ですが有難くも特攻隊滑空部隊の桜剛隊と言ふ隊名を戴いて出ますから隊名を恥ぢない働を新聞ラジオに報道する丈けの戦功を立てねばなりません故手紙も出せないと思いますから新聞ラジオを取った人に桜剛隊と言ふ事を言って見聞を頼んで置きなさい。私共乃行先はレイテの応援　途中約二週間楽しき便りはレイテ島より鉛筆の走る間も時計は刻々と進み出發の時間も迫って参ります。楽しき兵舎で一夜の夢を結ぶも今夜限り勇躍征途につきます。

今私の心は晴々として雨後の月の様です。明日が出發皆様に宜敷さようなら

昭和十九年十二月五日　　正義

「編注・書面の句読点は、便宜上編集の際に付記した。」

◇　◇　◇

○空挺館について

空挺館は、明治天皇の「御馬見所」として明治44年に東京目黒の騎兵学校内に建てられ、明治天皇が修業式に行幸され学生の馬術を天覧された由緒ある建物です。大正5年騎兵学校が習志野の地に移転した際、同時に移築され、迎賓館として使用されていました。昭和37年に「空挺館」と命名し、空挺精神の伝統継承の場として旧陸海軍及び自衛隊の空挺資料並びに騎兵資料等の展示館として現在に至っています。

平成23年、移築から百周年を迎え、老朽化が進んだ空挺館の改修工事が行われ、12月には落成式が行われました。展示資料も整備され、第一空挺団の広報資料はじめ、復元された優美な内装も一見の価値があります。

空挺館は、駐屯地の夏祭り等のイベントの際に一般公開されます。記事で紹介された遺書は、空挺館2階・旧挺進部隊関係資料の展示室に収められています。

（編集・倉形桃代記）

川南護国神社秋季大祭

全日本空挺同志会会員
笹原　孝文

平成24年11月23日、「空挺落下傘部隊発祥之地」である、宮崎県児湯郡川南町において、町が主催する「川南護国神社秋季大祭」が雨中の中無事に行われ、日高昭彦川南町長をはじめ地元の代表者、全日本空挺同志会・衣笠会長、各県支部からは、玉置宮崎県支部長、山本近畿支部連合会長、森下長崎県支部長、方違鹿児島県支部長・崎村千葉県支部長代理が参列した。

また、自衛隊関係者は、現役空挺隊員を代表し、第1空挺団長、航空自衛隊新田原基地司令、第43普通科連隊長、第24普通科連隊長等が参列した。

これに加え今年は、第3普通科大隊（大隊長・小原2佐）以下15名が日出生台演習場での演習の後、慰霊祭に参列した。

旧挺の方々を含む同志会員、都城とえびの駐屯地に所属する元挺、ご遺族、来賓、町民の方々等、約200名が参列した祭典は、祭典奉仕者の入場により開始され、都城駐屯地の隊員によるラッパ吹奏、国旗掲揚、英霊（旧軍落下傘部隊戦没将兵1万2千柱、川南戦没将兵634柱）に対し黙祷の後、神事と続いた。祭典終了後「空挺落下傘部隊発祥之地」石碑前で記念撮影を行った。

大祭前日には、ホテル「竹乃屋」において宮崎県支部主催の前夜祭が盛大に行われ、川南町長をはじめ町議会議員及び地元協力団体と空挺同志会の絆を更に深めた。

挨拶をされる日高昭彦川南町長

新刊図書紹介

渡辺洋一著『若者たちよ！君たちに伝え残したいことがある。―近代史の真実と日本の危機―』

年初に友人から「待望の本が出た。是非読んでみてくれ」ということで、本書が送られてきた。A5判236頁の小著である。著者は同年代の方であるが、歴史や軍事史の専門家ではない。旧制大阪大学政治学科を卒業後、商社マンとして帝人、サントリー、ワールド、国際自動車等に勤務し、専務・副社長として各社の国際関連事業を担当し、50年間の勤務を通じて世界各国の近現代史と実態を学び、日本の現状に強い危機感を覚え、遺書のつもりで本著作に着手、15年を要して書き上げたという。豊富な体験を通じて自学自習しただけあって、一読して、著者の歴史観の鋭さ、その溢れる憂国の至情に感動し、膝を打って共感した。各章の主要標目のみを掲げると次のとおりである。

はじめに―執筆に至った経緯

第一章　世界は西洋列強に食い荒らされ、日本は米ソの罠に嵌められた

・近世から今日に続く欧米列強の世界支配／列強による侵略隠蔽の東京裁判と自虐史観／大東亜戦争の意義／日本人は戦後占領軍の策略により牙を抜かれ、魂を失った／日本は内憂外患、亡国寸前の淵にある

第二章　中国の日本侵略の脅威に目覚めよう

第三章　立ち上がれ日本、甦れ日本

第四章　戦後レジームから脱却しようおわりに―がんばろう日本―出で来たれ救国のリーダー

是非、御一読をお薦めしたい。特に戦争を知らない若い世代の方々にとっては必読の書である、と考える。

○発行所「K&Kプレス」
〒102-0093
東京都千代田区平河町1-7-3
半蔵門堀切ビル4階
TEL03-5211-0096
FAX03-5211-0097

定　価　本体952円＋税

オペラ「ＫＡＭＩＫＡＺＥ―神風―」

平成25年1月31日・2月2日・3日、東京文化会館大ホールにて、作曲家三枝成彰氏の新作オペラ「ＫＡＭＩＫＡＺＥ―神風―」が開幕する。オペラというと、オーケストラ・朗々と物語を歌い上げるという印象がある。最初に伺った時、私の中で特攻隊の話を歌劇にするということを、なかなかイメージできなかった。このオペラは、実在の特攻隊員と婚約者のエピソードをベースに作られた。穴沢利夫少尉（福島県出身・昭和20年4月12日知覧基地から出撃・戦死）と婚約者の智恵子さんの物語はよく知られており、多くの書物や演劇の中で語り継がれている。特に穴沢少尉が智恵子さんのマフラーを「現在持っている物の中で唯一、あなたの身につけたもの」として大切にして、出撃の際にも巻いて行ったこと。残された手記や手紙、特に智恵子さん宛に書かれた遺書は、残される婚約者への気遣いと愛情が、清く力強い訣別の言葉の端々から溢れ出していて、私は読む度に心打たれる。

オペラは、実際のエピソードとは異なる筋書きだが、三枝氏が長年構想を温め、上演を悲願とされてきたもので、特攻隊員の方々だけではなく、戦場・国籍を問わず「第二次世界大戦で亡くなられた全世界の人々に捧げる」というお気持で作られた。戦時下、理不尽な運命に翻弄された愛。『必死』の特攻作戦は何故行われたのか。その残酷な運命を真直ぐに、時に苦悩しながらも受け止め、出撃された特攻隊員、見送る側の悲しみに心を重ね、自分と等身大の人間の運命、そして命の価値を噛み締め考える機会として欲しいとの願いも籠められている。

特筆すべきは、日本的な透明感、美しさのあるオペラを作りたいというこ

とで、すべて日本人のアーティストの手によって上演されることだ（チラシ参照）。特に美術担当として、日本画家の千住博氏が参加されていることは興味深い。大きな舞台に、どのような空間が出来るのだろう。ポスターの絵も、千住氏の筆によるものだ。散り始めた桜の樹の下で、海の彼方に飛び去っていった恋人を見送り、いつまでも佇んでいる一人の女性。そこに吹く風・波のざわめきまで聴こえてきそうだ。亡くなった方々へのレクイエムにしたいとのお気持ちが伝わってくる。

脚本は、作曲を手掛けた三枝氏はじめ、経営コンサルタントの掘紘一氏（原案・台本）、三枝健起氏（演出）、千住博氏（美術）の四人で練り上げたとのこと。『今の時代に本当に必要なものは何か？問いかけていく一つの機会だと捉えています』

世界に向けて発信されるオペラ「ＫＡＭＩＫＡＺＥ―神風―」どのような反響があるだろうか。これは、まだ百年も経っていない、私達の両親・祖父母が体験した時代の出来事なのである。

（編集・倉形桃代記）

平成24年度第３回定時理事会・臨時評議員会等報告

事務局長　羽渕　徹也

一　理事会、評議員会の開催

昨平成24年11月30日（金）に、平成24年度第３回定時理事会が、及び同年12月５日（水）に、同年度第１回臨時評議員会が、いずれも（公財）水交会会議室において開催され、別掲の平成25年度事業計画及び収支予算（案）が審議され、いずれも平成25年度計画として承認されました。

また、定款変更に伴う副理事長職の新設、及び辞任等に伴う新たな理事、評議員が選任されました。その結果、当顕彰会の役員等は次のとおりとなりました。

「理事」　理事長　杉山　蕃
副理事長　藤田　幸生
専務理事　衣笠　陽雄
理　　事　深山　明敏
同　　大久保　隆
同　　臼田　智子
同　　廣嶋　文武
同　　笹　幸枝
同（新任）　小倉　利之
同（新任）　水町　博勝

「監事」
伊集院雅英

「評議員」
秋山　政隆
飯田　正能
石井　千春
太田　兼照
高嶋　博視
中村　家久
根木　東洋
（新任）　大穂　園井
（新任）　早川　雅彦
大穂　孝子

「特別顧問」

※なお、新しい事業として、当顕彰会内に「特攻ライブラリー」の新設・整備等が計画されていますので、会員の方で特攻関係の蔵書等をご寄贈頂ける方がおられましたら、事務局宛着払いでお送り下さるようお願いいたします。

二　第34回特攻隊合同慰霊祭の開催について

本会報第94号に「慰霊祭御案内」を同封しておりますが、会員の皆様方のみならず、ご家族、お知り合いの方などお誘い合わせの上、多数ご出席下さるようお願い申し上げます。

出席される方は、同封の払込み用紙にご記入の上、お申し込みください。

①　慰霊祭の日時・場所
平成25年３月30日（土）靖國神社
参集殿・集合完了　10時45分
慰霊祭　靖國神社拝殿・本殿
11時　～　12時

②　懇親会の場所・時間
靖國会館２階
12時30分～14時

③　会　費
慰霊祭及び懇親会出席者
一般会員　七〇〇〇円
遺族会員　六〇〇〇円
慰霊祭のみの出席者
二〇〇〇円

※なお、案内書にも記載してありますが、今回から慰霊祭及び懇親会終了時に最寄り駅までのバスを運行する予定です。

三　平成25年度年会費の納入について

今回平成25年度会費を納入していただくために「郵便払込票」を同封してお

りますので、よろしくお願いいたします。

なお、会費欄の上に入金済みと表示してあります方は、既に領収済みですから、お納めいただく必要はありません。

◇

○ 平成25年度事業計画

一　方　針

特攻隊戦没者慰霊顕彰会は、特攻隊戦没者の慰霊顕彰を主たる事業として各種公益目的事業を推進する。この際、顕彰会等の世代交代の現状と平成24年度の成果から、委員会組織を見直すと共に若手会員の自主積極的な事業参加により、顕彰会活動全般の活性化を図る。また、若者を対象とした広報、全会員による募集活動等により会勢拡充を図る。

二　各種実施事業

1　慰霊事業

ア　3月30日（土）の靖國神社における特攻隊合同慰霊祭及び9月23日（月）の世田谷山観音寺における特攻平和観音年次法要を実施する。

イ　国内外の他慰霊団体が実施する特攻隊戦没者に関連する慰霊祭等には、陸海軍のバランス及び特攻作戦の種別等を考慮し、参加又は協力する。この際努めて役員等と共に参加未経験者を同行させ、顕彰会をＰＲし、及び現場の実情を把握させる。

2　広報事業

ア　募　集

広報活動と一体化した効果的な募集活動により、会員の獲得に努める。この際、各地慰霊祭会場等における募集・広報活動、若者向けホームページへの更新、入会案内ページの充実、他慰霊団体ＨＰ等関連サイトとのリンク化を重視する。

イ　広　報

①　歴史的資料として、また、特攻隊の功績を国民に広報・普及・継承するための広報誌として会報『特攻』を発行し、全会員に配布するとともに会員以外の希望者に頒布する。

②　「会報編集委員会」を新たに設置して、公益法人に相応しい、若者にも理解しやすい内容、様式、年間発行数等を検討する。平成25年夏頃までに編集基本方針（案）を作成し、平成26年年頭から新体裁での発行予定で準備する。

③　ホームページ上に、会報『特攻』の内容を公開するとともに、可能な範囲で特攻隊戦没者に関わる慰霊祭情報等を掲載し、広報する。また、法令に定められた当顕彰会の運営状況等の情報を公開する。

3　特攻勇士之像建立事業

護国神社等へ「特攻勇士之像」を奉納する事業を継続する。

4　出版事業

特攻隊戦没者等に関する史実の調査及び研究資料等の収集を行う。この際、可能な限り、特攻関係者からの直接聴取、各地の資料館等での資料発掘等に努め、記録に残す。また、当顕彰会が従前に刊行、作成、又は所有保管している図書・資料を整理し、「特攻ライブラリー」として希望者（会員限定）に頒布又は紹介する。

三　全体委員会事業

1　全体委員会は、副理事長を長とし、理事会の業務執行機関として、全体委員会本部、企画委員会及び募集・広報委員会からなり、顕彰会の事業計画に基づき、各委員会ごとに細部計画を作成、実施し、各委員長は、その結果を理事会に報告する。

2　全体委員会本部（長・専務理事）

ア　公益財団としての報告資料の作成、全体委員会の開催及び各委員会の活動に伴う経費、部外との連絡調整等に関し支援する。

イ　当面、現在保有する資料・書籍を整理し、「特攻ライブラリー」を開設する。

3　企画委員会（長・業務執行理事）

ア　慰霊祭に関する事項、特に当顕彰会が実施する慰霊祭への支援、特攻勇士之像建立事業に関する資料作成等を実施する。

イ　顕彰会会員の意識・知識の向上を図るため、特攻に関する講演会・懇談会・勉強会等を計画、実施する。

4　募集・広報委員会（長・業務執行理事）

ア　会報編集委員会の編集方針に基づき、会報『特攻』を発行する。

イ　募集活動及び各種広報活動を実施する。また、募集・広報用資料、資機材を作成する。

ウ　効果的な募集・広報のため、ホームページの有効活用、他団体への会報記事の投稿等を実施する。

四　その他の事項

・全国各地の特攻関係者との連携強化

各地慰霊祭を活用して生存特攻隊関係者からの情報・資料の収集を行う。この際、地域支部組織の設立を念頭に、特攻隊関係慰霊祭、特攻関係者、記念館等の実情を把握し、記録する。

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
平成２５年度正味財産増減収支予算書

平成２５年１月１日から平成２５年１２月３１日まで

（単位：円）

科　　目	予算額	前年度予算額	増　減	備　　考
Ⅰ　事業活動収支の部				
1　事業活動収入				
①　基本財産運用収入	7,825,000	6,100,000	1,725,000	
②　特定資産運用収入	185,000	95,000	90,000	
③　年会費収入	4,500,000	5,750,000	△ 1,250,000	会費減少
④　慰霊事業収入	2,700,000	3,650,000	△ 950,000	参列者減
⑤　出版事業収入	130,000	300,000	△ 170,000	売上減少
⑥　寄付金	2,000,000	2,000,000	0	
⑦　雑収入	50,000	50,000	0	
事業活動収入計	17,390,000	17,945,000	△ 555,000	
2　事業活動支出				
慰霊祭懇親会費	860,000	1,430,000	△ 570,000	
像制作委託費	1,200,000	1,200,000	0	
発送等委託費	1,400,000	1,630,000	△ 230,000	決算実績
他団体寄付金	1,850,000	2,740,000	△ 890,000	参列人員減
役員報酬	280,000	280,000	0	
給料手当	3,926,000	3,980,000	△ 54,000	
福利厚生費	540,000	540,000	0	
旅費交通費	2,650,000	2,690,000	△ 40,000	
通信運搬費	440,000	520,000	△ 80,000	
減価償却費	178,094	165,610	12,484	
消耗品費	520,000	340,000	180,000	
印刷製本費	2,580,000	2,520,000	60,000	
会議費	260,000	300,000	△ 40,000	
光熱水料費	120,000	100,000	20,000	
賃借料	1,620,000	1,540,000	80,000	
諸謝金	120,000	130,000	△ 10,000	
雑支出	100,000	100,000	0	
退職手当引当資産繰入支出	155,000	0	155,000	※経常費用に変更
事業活動支出計	18,799,094	20,205,610	△ 1,406,516	
評価損益等調整前経常増減	△ 1,409,094	△ 2,260,610	851,516	
基本財産評価損益等	504,000	107,384	396,616	
特定資産評価損益等	0	0	0	
当期経常増減額	△ 905,094	△ 2,153,226	1,248,132	
Ⅱ　経常外増減の部	0	0	0	
1　経常外収益	0	0	0	
特攻像建立基金取崩	0	1,200,000	△ 1,200,000	
投資活動収益計	0	1,200,000	△ 1,200,000	
2　経常外費用	0	0	0	
退職手当引当資産繰入支出	0	214,000	△ 214,000	
経常外費用計	0	214,000	△ 214,000	
当期経常外増減額	0	986,000	△ 986,000	
当期一般正味財産増減額	△ 905,094	△ 1,167,226	262,132	
一般正味財産期首残高	15,707,580	10,518,968	5,188,612	決算見込期首残額
一般正味財産期末残高	14,802,486	9,351,742	5,450,744	
Ⅲ　指定正味財産増減の部	0	0	0	
一般正味財産への振替	0	1,200,000	△ 1,200,000	
当期指定正味財産増減額	0	△ 1,200,000	1,200,000	
指定正味財産期首残高	274,400,000	274,400,000	0	
指定正味財産期末残高	274,400,000	273,200,000	1,200,000	
Ⅳ　正味財産期末残高	289,202,486	282,551,742	6,650,744	

事務局からの報告等

寄附者御芳名（敬称略）

（平成24年10月1日～12月31日）

（単位千円）

一一　杉山　蕃　一〇　永井　勝一　千葉県
一〇　熊谷　淳　一〇　甘利　祐二　東京都
八　辻井　圭三　五　久貫　兼資　神奈川県
五　酒寄　和郎　五　高尾　昇三
五　佐藤　一志　五　村越　正清
五　黒谷久美子　四　久保田久弥

御芳志誠に有り難うございました。

◇　◇　◇

新入会員名簿（敬称略）

（平成24年10月1日～12月31日）

埼玉県　後藤　昭一　奈良　泰夫（24・3・28）
東京都　上田中　俊　西　正昭　自見　省（24・1・3）
神奈川県　福島　健一　役山　明（24・6・20）
長野県　田中　悠樹　大内　春己（24・8・5）
大阪府　合田　好男　古川　忠純　長澤　剛（24・9・12）
福岡県　上田　真美　町田　乾郎（24・4・3）
市川　国雄
中野　芳江
熊谷　淳
村中　一男
秀嶋　宏（24・9・2）
今村　武彦（24・2）
有井　包廣（24・3・29）
豊田　行雄（24・10・15）
熊倉　順策
鈴木　洋平
古橋　茂（24・9・3）
笠松　澄
谷　和二
橋本　芳雄（24・5）
宮北　實（24・9・5）
芳賀　義文（24・11・19）
角南　加男（24・5・2）
田村　孝信（24・7・10）
上野シヅコ
高橋　主税（24・1・20）
田口　成男（24・5・27）
山口　宗之（24・3・21）
池上　博道
矢内　守義

◆　◆　◆

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の意を捧げます。

群馬県　小山　英一（24・8・24）
群馬県　黒沢　丈夫
群馬県　小板橋　正
埼玉県　栗原　宏（24・11・30）
埼玉県　田中　敏明（24・6・22）
千葉県　春山　善

新潟県
静岡県
愛知県
大阪府
兵庫県
岡山県
山口県
福岡県
熊本県
宮崎県

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革
昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化
昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足
初代会長　竹田　恒徳　元宮様
二代会長　瀬島　龍三　氏
平成5年11月財団法人認可
三代会長　山本　卓眞　氏
平成23年1月公益財団法人認定
現理事長　杉山　蕃　氏

○当顕彰会の主な事業
・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
・広報誌等の発刊
・講演会等の開催その他

○年会費
・一般会員　3000円
・学生会員　1000円

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4596

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛としてください。

記

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4596